ダンジョンにジェダイがいるのは間違っているだろうか

ふくよかな体型

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ある日神の不注意で死んでしまった少年。

本来なら死んだら輪廻転生の輪の中に入るのだが予想外の事態で今の状態では輪の中に入れないと神に言われる。

唖然とする少年だが、神から輪廻転生の輪の中に入れるには、調整に時間が掛かると言われ終わるまで、別の世界に行ってみないかと提案をされる。

少年は行きたいと言う。

ルーレットで決めた世界は、スターウォーズの世界だった。

神からスターウォーズの世界で最も強力な特典を貰いその世界に転生する。

スターウォーズの世界で、多くの偉業を成し遂げた後この世界から去った。

神のいる所に戻ってきた少年（老人）は神から衝撃的な事を言われる。

目　次

用語説明
用語説明（ジェダイ）――――1
用語説明（ライトセーバーの型）――――19
用語説明（フォース）――――31
設定
オリ主設定（スターウォーズ・ダンまち初期）――――48
プロローグ
転生――――53
本編・原作前　ロキ・ファミリア入団
第1話　新しい世界・神ロキとの出会い――――58
第2話　黄昏の館・衝撃の過去・勧誘――――64
第3話　首脳陣・勇者（フレイバー）との手合わせ――――68
第4話　神の恩恵・ステイタス――――75

用語説明

用語説明　（ジェダイ）

【教義】

もともとは哲学者グループとして始まった組織のため、哲学性や宗教性が強い。

しかし「これこそジェダイの哲学」というものは定めにくい。これは、教義が時期によって変遷・進化してきたことと、教義を教える立場の人間がとにかく多く、説く人によって相互に矛盾や相克が生じるためである。

これはキリスト教や仏教など一般的な宗教と共通する特質である。

そのなかでも根源かつ共通の一点を探れば、ジェダイが重んじる教義は「フォースとの調和」に帰せられるだろう。

あらゆる物体や現象、行動などに存在するエネルギー「フォース」を理解し、フォースを介して物体や現象や行動をコントロールし、破滅的な現象にいたらぬよう「調和」の道を探る、というのがジェダイが重んじる概ねの教義といえる。

そのように「フォースを調和の方向へとコントロールする」という行動をとるために、ジェダイはフォースのうち特に光明面ライトサイドを重視する。

そして「調和」という意図があるため、自分の感情や行動を厳しく律し、軽挙妄動を戒め、刹那的な欲望や願望を押さえ込む、修道士のような生活を是とする。

逆に、調和を乱しかねず、激しい感情と親和性の強い、フォースの暗黒面ダークサイドを敬遠し、避ける傾向が強い。

実際には、ジェダイでありつつも暗黒面を研究し、場合によっては体得する人物もいるのだが、最初から暗黒面を肯定する修業はまずし

ない。

ごくごく簡単に言うならば「フォースの光明面との調和」こそがジェダイの基本教義である。

【規律】

教義ではなくルール。

これは時期によって変わり、一様には言い難い。

基本的に「フォースのライトサイドへの献身」「滅私奉公」を是とするため、禁欲的なものが多い。

旧共和国時代のジェダイ騎士団においては極端なまでに徹底されており、

「ジェダイになれるのは幼少期、物心がつく前の幼児から。できれば生後半年以内」「物の私有は禁止」「恋愛や家族愛などは私情を奮い立たせるから禁止」

といった、ある意味で非人間的なものがあった。

特に批判と問題意識が強かったのが「生後半年以内」という年齢制限である。

これは、親許で過ごすと「肉親の情」が「ジェダイの掟」よりも根底に根差してしまい、情に縛られて掟を放棄してしまう、という発想からきたものではある。

しかし、

ジェダイの閉鎖的な特権意識を養育する原因となる「赤子泥棒」という批判を招く（＊2）「親に捨てられた子供」という意識をジェダイに抱かせる（＊3）子が恋しくなった親が還俗させたいと願って訴えた結果騎士団を離脱するジェダイが発生する

と、多くの軋轢を生んだ。

「息子を遠くの惑星に送り、手紙もメッセージも送らず、その子が知っていた唯一の家から送りだして、彼らが子供をテンプルに閉じ込めるのを許し、正当に子供のものであるべきすべてを取り上げ、盗んだのだ。

それがここにきて、厚かましくも息子を愛しているだと？　愛している●●●●●だと？」

「母親？　息子？　愛？　きみはその言葉の意味などなにひとつわかっていない」

この発言はドゥークーが、かつてジェダイにした息子を今さら取り戻そうとする母親に対して本心から激怒したときのもので、人間の精神の根幹をなす「親子関係」「家族関係」をいびつに歪めるジェダイへの最大の糾弾といえる。

ただ、これら規律は確かに存在していたものの、運用面ではある程度柔軟ではあった。

例えば、「生後半年の年齢制限」を過ぎて、三歳や四歳、高い例では六歳から入門、というケースも割と多い。

大っぴらでないにしてもジェダイ同士で（あるいは外部の人間と）恋愛感情をはぐくむ例はあったし、特殊事情があってのこととはいえ結婚して子供を産ませたジェダイもいる。

そもそも礼法も教義も規律も時期によって変わるのが当たり前で、体制側も状況を総合的に判断して黙認することが多かったらしい。

レジェンズにおいて戦後にルーク・スカイウォーカーが再建したジェダイ騎士団もこの問題を把握しており、年齢制限や恋愛感情の禁止などは積極的に解除している（それはそれで色々と苦労はあったが）。

カノンでは不明だが、少なくともベン・ソロを親元から完全に離すことはしていない。

【平和の騎士】

フォースとの調和、現実社会との調和を重んじたジェダイは、いつしか「平和の守護者」として銀河で起きる難題に取り組むようにもなった。

もともと「調和」と「平和」は概念が近い。

また、現実に起きている対立を解きほぐし調和させて平和に導くことは、ダークサイドのフォースが満ちた世界をライトサイドに転向させるという意味で、ジェダイの教義を実践することにもつながるし、実践を通して得難い修業ともなる。

共和国勃興の折の混乱期を経て世情が安定してからは、この傾向は一層強まり、ジェダイは外交官や特使としての性質が強い集団となった。

現実の宗教でも、ただ寺院に閉じ込もるだけでは駄目で、学んだことを実践してこそ宗教家たりうる、と説く宗派は多い（＊4）。

その過程で、自衛用の光刃剣ライトセーバーや、それを用いた剣術、体術、戦闘に対する思想なども発展していった。

銀河共和国にとっては、平和解決のために動いてくれるジェダイは「警察力の補助」としてありがたい援軍であり、ジェダイにとっても共和国は対立するよりも協力したほうが何事もスムーズに解決する関係であった。

そのため、ジェダイが数を増やし「ジェダイ騎士団」を作ると、銀河共和国の特別顧問団のようになり、相互に協力する関係となっていった。

積極的に平和を維持するために、ジェダイが学ぶべきことは極端に増えた。

フォースの訓練は言わずもがな。

自衛のためのライトセーバーや体術の訓練も欠かせず、各星系の言

語や文化、歴史を学ばねば交渉なぞとうてい出来ない。
しかも、銀河共和国の所属惑星の数たるや、数十万にも上る。つまり、ジェダイ一人につき数十個の惑星を担当している計算になるのだ。
常に平和のために奔走しながら並行して勉学に励まねばならず、その人生は過酷を極める。

ただ、ジェダイ騎士団は銀河共和国に所属する一部門ではない。
両者の関係はほぼ対等な、あくまでオブザーバー的な関係である（運営資金などは共和国側が公金から出していると思われるが）。
そのため、歴史のなかでは共和国の要請を騎士団が拒んだり、いつまでも動かない騎士団に共和国がいらだったり、両者そろって仲良く堕落したり、といった対立を引き起こしたこともある。

【負の面】
常に完全な国家が存在しないように、ジェダイの教義・組織も常に完全ではなかった。
ジェダイはしばしば、自分の教義ゆえに危殆に陥ったことがある。
「調和」を大事にしすぎる姿勢が「安易な妥協」や「事なかれ主義」を引き起こしたり、目の前の問題・目に見える現象が解決されることだけを求めて弥縫策に走ったり、根本的な原因を放置して類似の事件が何度も起きたり、そもそも行動前の議論を優先して「会議は踊る」状態になったり、という自縄自縛の側面も多い。

まずいことに銀河共和国にもこの手の「事なかれ主義の蔓延」「議論倒れで行動が遅い」「その場しのぎの弥縫策に走る」などの欠陥が多く、ジェダイ騎士団と銀河共和国が仲良く機能不全に陥ることもよくあった。
まだ規模が小さかった頃ならまだしも、所属惑星が増えて意思統一が困難になるにつれて、その傾向は顕著になっていった。

なにしろ、ジェダイ騎士団そのものには実権が無い以上は、結局は共和国の代理人に過ぎない。
当事者たちにとっては、共和国とは心理的に距離を取っている代弁者が紛争に嘴を入れる時点で迷惑でしかない場合は多い。
そればかりか、ジェダイが辛くも調停に成功しても、それで終わりではない事例もある。
そもそも共和国の元老院の議長や側近が、意志統一できていないのに勇み足同然にジェダイを派遣し、ようやく彼らが意見をまとめて共和国に成果を持ち帰っても、それが元老院に受け入れられるのかはまた話しが別。
無関係な議員達は寝耳に水だと反発して議会はこれまた紛糾し、調停の為に費やした努力が水泡に帰すことも。
ジェダイのほとんどが、銀河共和国と各惑星の板挟みに晒される状況を憂いていた。

逆に、強大で超常的な能力を持つために、事態と解決策を読み誤り、かえって大きな被害をもたらすこともある。
共和国千年の歴史の中では稀と言える程度の頻度だったとは言え、決して軽視出来ない傷を庇護対象の惑星や政府、ジェダイ自身に残した。

そうした失態によって一度事態収拾に失敗すれば、侵略者側を助けて被害者側にトドメを刺してしまったり、外交団を死地に派遣してむざむざ全滅させたり、凄惨な結末を迎える。
こうした惨劇は、特にジェダイたちが事態を図りにくくなる負の感情・暗黒面のフォースで満ちた地、つまりは紛争地域や、そうした地に対して調査不足なまま行動に移った場合に起きやすかった。
さりとて、調査や熟慮を重ねていては機を逸することもあり、常に判断は難しい。これは「組織」である以上、どこにでも起きる問題であった。

共和国内であれば、そうした事態に至る前に早々に争いの芽を摘むことも可能だが、共和国外のアウターリム絡みの面倒事が起こると自発的に首を突っ込む訳にも行かず、共和国が規模拡大するにつれて諍いの種は増え続け、収拾が難しい事態は常についてまわった。

加えて、ジェダイたちは、フォースをみだりに普及させて世の安定を乱さない為にも、自分達の力の性質や限界については仔細に説明せずに秘匿してきた。

書物による記録を廃止し、フォースを使わないと開示出来ない記録媒体「ホロクロン」を常用し始めたのはその好例である。

この方針は元老院との無用な諍いを防いで適切な距離感を保つ為にも必要な措置ではあった。

ジェダイには敵も多く、暗黒面のフォースが広まればそれだけ弱体化する、という内情を広めるなぞもっての外である。

しかし、この方針が、時に特権主義的、又は過度に秘密主義だという批判に繋がっていた。

それよりも難儀だったのは、ジェダイ騎士団はそれだけで独立した組織であり「それ以上」がなく、ジェダイの失態はジェダイのみに帰せられたことである。

実際には、ジェダイよりも共和国や現地政府や民衆が悪いという事態も結構あるのだが、ジェダイは共和国の上下関係にないため「これは共和国の責任である」とすることができず、被害者からの非難や批判に晒されることにもなった。

また、ジェダイの調和精神そのものに背を向け、我欲のためにフォースを振るう者も多く生まれた。

俗にいう「ダークジェダイ」であるが、ジェダイの精神に背を向けてもジェダイとして培った技が消えるわけではない（むしろ暗黒面を取り込んでパワーアップする場合が多い）ため、彼らが我欲のために暴走して大きな事件を引き起こすと、「犯罪者を生んだ組織」として

ジェダイが槍玉に上げられることも増えた。

それでもジェダイは平和の維持に尽力し、宇宙の民衆の「無敵の交渉人であり平和の守護者」という偶像を辛うじて保つことに成功していた。

が、それが決定的に瓦解したのは「クローン大戦」である。

銀河共和国に反旗を翻して全銀河規模の大乱を引き起こした独立星系連合の元首が「元ジェダイ」のドゥークー伯爵、その独立星系連合と戦う銀河共和国の将軍も「現役のジェダイ」であったため、「ジェダイ同士が戦争をしている」「ジェダイの内戦に銀河共和国・銀河全体が巻き込まれた」状態となり、結果としてジェダイの権威は地に墜ちることになった。

加えて、先述の通り「暗黒面の蔓延によって、千里眼含めあらゆる能力が弱体化しているが、それを身内以外には報告していない」ことも、結果として問題を招いた。

何だかんだで、ジェダイにも任務失敗の事例は過去にあれど、少なくとも共和国内の揉め事は最終的には鎮静化させて、千年に渡って平和を維持してきた。

その無敵の交渉人であり平和の使者という信頼が「昔は出来たことが今は出来ない」という形で崩れてしまったことで、

「実は弱体化していて、ジェダイには戦争に勝つ力なぞ無いのでは?」

「鍛えた力を振るいたくて、戦争を愉しむ為に手を抜いているのでは?」「クーデターを目論んで、共和国を弱体化させる為に悪戯に戦争を長期化させているのでは?」といった、疑念や不信は大衆にまで蔓延してしまった。

「かつての千年に渡り共和国を支えたジェダイの道徳的存在意義は、最早擦り減って存在しない」

などと、元老院の中でも高潔な議員からすら揶揄される始末である。

そしてもう一つの欠点は、ジェダイが傲慢になる現象が多発したこと。

オビ＝ワンのことを「理知的で穏和な、まさに理想的なジェダイの鑑」と称賛する声は作中でも多いが、裏を返せば、好人物をそうして褒めそやす必要があるくらいに、理想からかけ離れたジェダイも多かったのだ。

ダークジェダイの誕生にも通じる話だが、フォースの使用者としては最大かつほぼ唯一の組織であったため、「フォースを理解するのは我々のみ」という特権意識が芽生えたり、裕福な環境で暮らすために世俗の世界に疎くなったり、実際に熱心に勉学に励んだ分知力も優れているため、過信ではない自負が選民思想的な優越意識に直結してしまいがちになる。

その結果、「なぜ高等な自分が下等生物の諍いに煩わされねばならないのか」という葛藤が無意識的に表出して、強力なフォースとライトセイバーを使うために欲求をゴリ押ししたり、自分の正義だけを優先して他者の意見を排除したり、といった慢心や傲慢が広まることにもなった。

敵対勢力たるシスが（表向き）滅んだことも、現状への満足や惰性を産んだ。

光明面のみに浸るために暗黒面の意識がいざ芽生えたときに簡単に流されることも多く、時期によってはダークジェダイが増えた。

そこに、上述した共和国の腐敗や堕落や事なかれ主義が流れ込むことで、旧共和国末期のジェダイはいよいよ自壊寸前に陥っていたのである。

当時を知る人物であるウィルハフ・ターキンは、「あまりにもエリート主義に染まっていたジェダイは、遅かれ速かれ滅びる運命だったのではないか」と回顧した。

とはいえ、これらはジェダイそのものの限界を示すことではない。ジェダイ自身が自らの過ちに向き合い、解決策を見いだし、不断に改革を続けていけば、完全とは行かずとも相当は解決できる問題ばかりだからである。

そして現に、シスは自分の過ちを認めて思想を発展させ、滅亡寸前の状態から一度は復興することに成功した。

ジェダイも、かつてはドゥークーを初めとして改革を訴える人物はいたし、騎士団崩壊後はヨーダも、旧来のやり方を改める方針に舵を切った。

あきらめない意志があり、不断の努力を積み重ねれば、ジェダイの教えは常に新しく続いていくだろう。

【ジェダイの組織】◆ジェダイ騎士団

ジェダイが所属する最大級の組織。「ジェダイオーダー」という別称もある。

オーダーには元々「部隊」という意味が有る為なのだが「規律」「掟」「指令」など他にも複数の意味を持つ多義語の為日本人的には紛らわしい。

首都惑星コルサントの「ジェダイ聖堂」に本部を置き、銀河中のほとんどのジェダイを管理下に置いていた。

また、ジェダイ騎士団の内部には後述するようなさまざまな組織・部署・階級があり、規模が大きいこともあいまって複雑な構造になっている。

ほとんどのジェダイは騎士団に所属するが、ジェダイ騎士団から離脱した・追放された人物でも「ジェダイ」と名乗っている例や、騎士団に所属しないジェダイが新しく弟子をとって戒律を授け「ジェダイ」とする場合もある。

そうした、いわゆる「はぐれジェダイ」「無所属ジェダイ」も世間一般ではジェダイとして通用しており、騎士団側も特にとがめたりはし

ないようである。
（例えば、騎士団から追放されたカイ・ナレックや騎士団崩壊後のオビ＝ワン・ケノービなどもジェダイとして通用しており、両名の弟子のアサージ・ヴェントレスやルーク・スカイウォーカーは一度も騎士団に所属したことはないがジェダイと名乗っていた）

◆ジェダイ聖堂
ジェダイ騎士団が拠点とする巨大寺院。
「寺院」というが、内部には公文書館（図書館）や意思決定機関たる最高評議会など多様な建築物の複合体である。
古代は銀河の各地にいくつか聖堂が分散していたが、時代の変遷にともない、コルサントの巨大寺院一つだけが存在するようになった。

……実はコルサントのジェダイ聖堂は、古代のシス神殿の真上に建てられた。
ジェダイ側としては「我らの光のエネルギーでシスの遺産を封印している」つもりだったのだが、却って「地下からにじみ出てくる闇のエネルギーを浴び続ける」結果となり、むしろジェダイ側に悪影響をもたらしていたという。
そもそも「地下に古代シスの神殿があった」という事実は何千年も前のものであり、最長老のヨーダさえ知っていたか怪しい。よって「シス神殿の封印」という理念は後世のジェダイには完全に忘れられ、ただ暗黒面の影響をひたすら無防備に浴びていただけの可能性が高い。
なんて判断だもっとも、そのおかげでシスの神殿は、帝国時代にシディアスが入るまでどのシス卿も進入できなかったらしいが。

◆ジェダイ評議会
ジェダイ騎士団に存在する四つの意思決定機関。
コルサントのシーンでよく映る、ジェダイ聖堂の四つの尖塔の頂上

にそれぞれ設けられている。……が、最高評議会以外はほぼ裏方。
ちなみに真ん中にある五つ目の大きな塔「テンプル・スパイア」にはナイト及びマスターへの昇格の叙任式を行う「騎士団の間」や、コルサントのテンプルで最も神聖とされる「尖塔の間」などが存在する。

◇最高評議会
一応他の三つの評議会と並べられてはいるが、「最高」と呼ばれる通りジェダイにこれ以上の組織はなく、常に責任を負わされる立場である。
基本的に「評議員」という場合この評議会のメンバーを指す。
十二人のメンバーによって運営され、騎士団の方針の決定や、階級昇進の諾否、叙任や追放などの人事、葬儀など、重要事項を協議する。
しばしば構成員の入れ替わりが起きるが基準はまちまちで、自ら引退する場合や、別の地位に就くがゆえの辞職、死亡などによる止むなき事態、不祥事による失脚、意見が合わないゆえの追放など、いろいろある。
ここがジェダイの最高責任機関のため、上述したようにジェダイの責任を一身に背負わされやすく、しばしば問題を引き起こした。

◇基礎知識評議会
ジェダイの古い知恵が必要とされる場合に助言を行う組織。
資料集等に載っているのみで劇中では言及すらほとんどされていないが、パダワンの訓練施設の類は基礎知識の塔の周囲に設けられているらしく、目立たないだけで結構いろいろやっているのかもしれない。

◇和合評議会
惑星間紛争等の鎮圧を協議する評議会とされているが、クローン戦争勃発に伴い最高評議会の議題も戦争の話ばかりになっているためイマイチ影が薄い。
一応共和国議院との連携はこちらが担っているらしい。

◇転任評議会

パダワンになれなかった候補生の処遇などを引き受ける。

転任評議会の塔にある「裁きの間」では道を踏み外したジェダイへの裁判が行われ、劇中ではアソーカ冤罪事件のエピソードで登場した。

◆公文書館

ジェダイのあらゆる蔵書を一括で管理している巨大な図書館。

資料はほぼすべてホロクロンにされており、紙媒体は少ない。

閲覧は基本的に自由だが、マスターでなければ閲覧が禁止される資料もある。

なかにはシスやダークサイドに関する記録もあり、一部はシスの技術で「汚染」されたものさえある。実質は封印倉庫という側面も強い。

【ジェダイの種類】

厳格な師弟制度を持つことも合わさり、ジェダイも内部でいくらかの階級にわかれている。

◇ジェダイ候補生

正式な入門前の、予備知識を詰め込む段階。

子供であることが多く、体が発達するまでは基礎的な教育や訓練にとどまる。

この候補生時点では特定のマスターに付くことはなく、班で行動し、ヨーダの教えを受けている。

ある程度成長し能力を磨くと、ライトセイバーの自作・フォースの技の習得・剣術フォームの訓練など本格的な修業に入る。

自分のライトセイバーを完成させるとパダワンまであと少し。

逆に、この時期に芽が出ないと、ジェダイの道を諦めて集団農場で農夫となるなどの道を選ぶことになるが、当然、それを望むものはま

ずいない。

旧共和国の千年間においては、フォース感応者の素質があると見込まれた人間は生後半年以内に親許から引き離されてジェダイ聖堂に引き取られ、「ジェダイ候補生」として基礎教育を受けた。

アナキン・スカイウォーカーは九歳で引き取られ、そのままパダワンになったため、この候補生時代を経ていない。

ただ、この年齢制限の「半年以内」というのは「できれば」という理想論に近く、実際には三歳や四歳（＊5）で引き取られた人物も多い。六歳からというのもあった。

そもそも、コルサントの表社会で生まれた子供ならともかく、暗黒街や辺境の惑星で生まれた子供なら、発見そのものが遅くなるのは避けられない。

それに子供にとっては親と理解できなくても、親にとってはかわいい子供である。親が子供の引き渡しに抵抗することは昔からよくあった。

したがって、生後半年以内に引き取られたジェダイ候補生というのは実際には少数派らしい。

◇パダワン

師匠となる特定のジェダイに仕え、マンツーマンで訓練を受ける階級。

厳密には「ジェダイ」ではないが、世間ではここから「本格的なジェダイ」と見なされる。

パダワンになったのは、アナキンは九歳から、ドゥークーやオビ＝ワンは十三歳から、アソーカは十四歳から、と幅がある。

このパダワンの状態から、試練を突破すると「ナイト」の叙任を受けることになる。

候補生時代にフォースの使い方は一通り学んでいるため、能力面で

はナイト以上のジェダイと変わりがない。人によってはマスター並みの実力を持つパダワンもいる。
むしろこの階級で重視されるのは精神性。
肉体も精神も大人となり、人格がほぼ定まる状態で、一人前のジェダイとしてふさわしい心を持っているかどうかが見定められる。
この精神面が練り切れていなければ、いつまでたっても上には至れない。

髪がある種族の場合は、髪を一房伸ばして細く結い、垂らす習慣がある。ナイトになるとこれを切り落とす。

◇ナイト
能力面・精神面でジェダイたるにふさわしいと見なされると、評議会で叙任式が行なわれ、ジェダイナイトとなる。
一人前のジェダイという扱いになり、パダワンを持ち指導する立場となる。
なお、弟子についてはみずから選ぶパターンと、評議会からあてがわれるパターンがある。
また、ごく希に弟子をとらないナイトもいる。

パダワン時代はただ自分だけを磨けばよかったが、ナイトとなり弟子を持つと「他人を磨く」というまったく新しい領域に踏み込むため、未経験の苦労をすることになる。
ある程度の責任も負う立場となるので、ナイトに叙任されるとまた大変、となるジェダイも多い。
しかし「弟子を導く」ことは「新しい見地から自分を磨く」ことにもなるため、かつての師匠の苦労を理解したり、より広い視野から物事を俯瞰できるようになったりと、ナイトになってから別途の成長を遂げることになる。
未熟な師匠と未熟な弟子が切磋琢磨することになるので、一番弟子とは強いきずなが産まれるというのもよくある話。

ちなみに「ジェダイナイト」という場合、この階級に所属する人物として呼ばれる場合と、単にジェダイの総称として呼ばれる場合がある。

すでにマスターなのに、あるいはまだパダワンなのに「ジェダイナイト／ジェダイの騎士」と呼ばれるシーンもあり、混同するとややこしい。

◇マスター

ジェダイの一般的な階級としては最高位。

ナイト階級でも抜きんでた能力を持ち、かつ顕著な実績を上げたものに与えられる階級。

弟子を一人前のナイトに育てることも条件とされるが、弟子を一人も養育せずにマスターとなった人物（＊6）もいるため、絶対条件ではない。

ただ、該当人物はマスターとなってから「いい加減にしなさい」とばかりに評議会から半強制的に弟子を押しつけられたため、弟子を取らないのは非推奨ではある模様。

マスタークラスともなれば、ナイト以下には許されない権限も与えられる。

例えば、公文書館にある禁書領域のアクセス、各部署の長官への就任などが該当する。

もちろんマスターに叙任されることは栄誉なことでもあり、ほとんどのジェダイはこの階級を目指しているが、だれでもなれる立場ではなく、厳しい審査をくぐらなければ叙任はない。

ただ、長年の平和によって緩和されることもあり、精神や武術など完全には練り切れていないジェダイがマスターになることも、実は珍しくなかった。

ちなみに「ジェダイマスター」という場合、この階級に所属する人物として呼ばれる場合と、弟子が師匠を呼ぶ尊称という場合、そして一般人が単にジェダイを呼ぶ場合とがあり、「ジェダイナイト」同様にというかさらにややこしい呼び方である。

◇グランドマスター

マスターのなかのマスター、真にジェダイを代表する者に与えられる称号。

ぶっちゃけ、作中ではヨーダ専門の称号となっている。比較のしようがないため、任命基準や権限などは不明。

単なる名誉称号（それも伝説的な）の可能性もあるが、実際にはヨーダ以前にもグランドマスターになれたジェダイはいたらしい。

◇評議員

ジェダイ最高評議会のメンバーを指す言葉。厳格な階級ではないが、実質それに近い。

評議会のメンバーは上限十二人と定められているため、その座に就ける人物は希（＊7）。

しかも名実共にジェダイの「顔」「代表」となるため、生半可な人物が惰性で就くことはできない。功績あるマスターの、そのまた突き抜けた人物だけが就ける、まさにジェダイを代表する人物たちである。

ただ、それだけに責任感も重く、就任以前はある程度自由に能力を発揮できたのに、この立場に就いてから考えすぎて動けなくなり精彩を欠く、という例も多い。

ちなみに、基本的にジェダイマスターしかなれない領域ではあるが、ごく希にナイト階級のまま評議会に入る人物もいる（＊8）。

その他、ジェダイ騎士団にはさまざまな部署があり、それらの責任

者もまたジェダイであるため、いろいろなポストが存在する。

例えば公文書館の館長、聖堂警備隊の隊長、などはマスタークラスが務める重職。

また、一般の師弟関係とは別に、剣術や薬物などの専門知識を教える講師など、専門職に特化した人物もおり、立場は幅広い。

剣術指南役として有名なのはシン・ドローリグとソーラ・バルクで、両名は直接育てるパダワンとは別に、個人的に剣術指導を求める人物を「弟子」として鍛えていた。

そのため、シンとソーラは生涯に数千人もの剣士を育てた計算となっている。

用語説明　（ライトセーバーの型）

ライトセーバーのフォーム

フォーム１：シャイ＝チョー（Ｓｈｉｉ―Ｃｈｏ）

別名サルラック戦法または決意の型。

最も基本的で、ジェダイ候補生が一番最初に習う型。

ジェダイがライトセーバーを使い始めた頃から本編開始時点まで、驚くべきことに２万５千年もの間受け継がれ、練磨されてきたフォーム。

古のジェダイが当時の剣術から編み出したため、一般的な金属製の刀剣を扱う剣術と共通点が多い。

基本なだけあって、攻撃、防御、受け流しといった動作、攻撃すべき体位、果ては練習方法まで、ライトセーバーを扱う上で必要な技術はすべて盛り込まれている。

ジェダイ候補生は１～２年程掛けてこのフォームを体に叩き込み、そこから以下の各種フォームを選び、修練を積んでいく。

極めれば最も無駄が少ないため、熟練したジェダイにも実戦で愛用する者は多い。

主な使用者：キット・フィストー

フォーム２：マカシ（Ｍａｋａｓｈｉ）

別名イサラミリ戦法または競争の型。

ライトセーバー同士の戦いに特化した型。初動は、片手で握ったセーバーを下段に構える。

手首のスナップを利かせた、鋭くかつ変幻自在な斬撃が特徴。

相手の防御をすり抜けて急所や弱点を突き、フェイントや牽制を織り交ぜて相手の技を塞ぐ、高い攻撃力と制圧力が持ち味。

シャイ＝チョーの次に考案された非常に古い型であるが、ライト

セーバー同士の戦いに特化しただけあって、ほぼ全ての型に対して有利に戦える。
洗練された型なので体力の消耗が少なく、冷静さと精密さを求めるために暗黒面に引き込まれることもないため、長期戦にも向く。
手首が重要なので片手で振るう場合が多いため、二刀流に派生する使い手もいる（もちろん両手を使う場面も多いから、二刀流専用のフォームではないが）。

弱点としては緻密さを求めるために、パワー不足に陥りやすい事と敵のフォースの流れの急変に弱い事。
シエンがベタ足から繰り出す力強い斬撃で力任せに突破されたり、ジュヨーの急変する不規則な技には太刀筋を狂わされやすい傾向がある。
またブラスター全盛以前の時代に編み出された事からブラスターからの攻撃を想定しておらず対処が本人の資質任せになるのも問題点。
もちろんいずれも使い手の力量次第で、マカシ最高の達人であるドゥークーにはパイク・シンジケートの一斉射撃もかすり傷一つつけられなかった。
相手を分析して隙を衝くのもマカシの持ち味なので、シエンに対しても弱点の足元を狙うなどして十分対処可能。

シスが滅んだとされる状況ではライトセーバー同士の決闘というのが想定し辛かった（ダークジェダイ戦しかなかった）ことと、ブラスターが普及し過ぎたことから、
旧共和国時代には実戦では無用な型とされ、ごく一部を除き、ほとんど訓練・演舞用にしか習得・研究されなかった。
シャアク・ティが剣舞で使用していたり、「反乱者たち」のケイナン・ジャラスが訓練時に仮想敵として振る舞う際のみに披露していたというのがその一例である。

逆にシス側では、対ジェダイ戦を想定して、マカシを独自に発展させて徹底的に習得しており、両者の剣術観の相違が垣間見える。

ただ、ダークジェダイが増加したこと、シス復活が確認されたこと、シスがダークジェダイを率いたことなどを受けて、

ＥＰ１の翌年にはジェダイの剣術指南役シン・ドローリグも、マカシを重視・教育する声明を出すに至った。

主な使用者：ドゥークー伯爵、アサージ・ヴェントレス、ダース・シディアス、コマリ・ヴォサ

フォーム３：ソレス（Ｓｏｒｅｓｕ）

別名マイノック戦法または立ち直りの型。

武器の主流がブラスターに移ると共に生まれた型。まるで弓を引き絞るような構えが特徴的。

ブラスターの弾を打ち返す技術から始まった、防御に特化した非常に手堅い型。

熟達すれば四方八方からの包囲攻撃さえ防ぎ切る。もし真に極める者があれば負傷させることは理論上は不可能、とまで言われる。

弱点は、攻め手が少ないこと。防御を攻撃に転じての、巻技の様な動作やカウンター攻撃はあるが、どうしても受け身にならざるを得ない。

相手の攻撃を防ぐことから始まるため、変幻自在の太刀筋で防御をすり抜けるマカシの対処も不得手とする。

もちろんこれも使い手の力量次第で、ソレスの達人であるオビ＝ワンの防御は、優れたマカシ使いのグリーヴァスやヴェントレスでも突破困難。

ただ、そんな彼でもマカシを極め剣技の中に巧みにフォースの技を織り交ぜるドゥークーには生涯一度も勝てなかった。

「防御によって耐え凌ぎ、必要な瞬間が来たならば速やかに最小限の攻撃を行う」という性質から、「ジェダイの在り方を体現するフォーム」と考えるジェダイも少なくないらしい。

オビ＝ワンは上述の通り、慎重な気質であったために師父直伝のアタールに馴染めず、ソレスに転向したところ剣才が開花した経緯を持つ。

その腕前は、メイス・ウィンドゥが「ザ・マスター」、オビ＝ワンがライトセーバー戦で生涯勝てなかったドゥークーも極めて熟達した達人だと素直に認めるほど。

そのオビ＝ワンのソレスは、共に戦うアナキンの扱うシエン（ドジェム＝ソ）の影響を強く受けたもので、攻め手に欠けるという弱点を克服している。

主な使用者：オビ＝ワン・ケノービ、サーム・セルリアン、キ＝アディ＝ムンディ、ルミナーラ・アンドゥリ、バリス・オフィー、デパ・ピラバ、ケイナン・ジャラス

フォーム４：アタール（Ａｔａｒｕ）

別名ホーク＝バット戦法または侵略の型。

フォースで脚力を強化して飛び回る、最もアクロバティックな型。アタル、またはアタロとも呼ばれる。

「さすがにソーレスはヘタレにも程があるだろ……」と考えた過去のマスター達によって考案された。

素早い動きと大胆な跳躍、変則的な動きと威嚇や牽制を織り込むことで、相手を翻弄しながら四方八方から攻撃し、隙を衝く。

フォースと肉体の技量に熟達すればするほどスピードも上がり、攻撃力も上がる。

ヴァーパッドのような特別な型ではないが、ヨーダやシディアスなど実写においても使用者の動きが凄まじいため、最も映像栄えするフォームと言える。

顔の横でライトセーバーを立てるような、いわゆる〝八相の構え〟を起点とする。ヨーダやクワイ＝ガン、およびＥＰ１におけるオビ＝ワンを見ると分かりやすい。

欠点としては、機動力を発揮するために体力の消耗が激しいこと、機動力を制御できなければ却って自分の方が隙を曝してしまうこと、

狭かったり逆に広くて周囲を囲むような動きが取れない空間ではスピードを活かせないこと。

ＥＰ１でクワイ＝ガンがダース・モールに敗れたのも、長期戦による体力の消耗と、狭い空間に誘導されてしまったことが大きな一因である。

さらに、『反乱者たち』でのオビ＝ワンとモールの最後の対決においては、オビ＝ワンは構えをＥＰ３でお馴染みのソレスの構えからＥＰ１で師弟で使っていたアタールにの構えに変えており、クワイ＝ガンがモールに敗れた立ち合いを再現しつつも今度はモールが敗れるという胸熱な演出を披露している。

「ソーレスだと惰弱だが、シエンはやり過ぎ」という意見もあり、歳を食っていてもこの型を敢えて使うジェダイは多い。

特に有名な使い手はマスター・ヨーダだが、彼の場合自身の最大の弱点である体躯の小ささ由来のリーチの短さを解消する意図でこれを使用している。

主な使用者：ルーク・スカイウォーカー、ヨーダ、ダース・シディアス、クワイ＝ガン・ジン、アソーカ・タノ、エージェン・コーラー、ザナトス、キ＝アディ＝ムンディ、イース・コス、この他明言はされてないが描写的にヴェン・ザロウも使用者と思われる。

フォーム５：シエン（Ｓｈｉｅｎ）

別名クレイト・ドラゴン戦法または忍耐の型。
ソレスとは対象的な、最も攻撃的な型。アタロより更に高い攻撃性と制圧力を求めて考案された。
大パワーを発揮して相手の防御や牽制の太刀筋を切り崩したり、跳ね返したブラスターを相手に命中させることを重視したりと、あらゆる行動が攻撃につながる。
その為、主に集団戦において前衛を務めるジェダイに採用者が多かったとされている。
他のフォームに比べて振りや残身がやや大きく、一撃の威力を重視するような力強い動作が特徴的。
両手で構えるケースが多いが昔のアソーカの様に逆手片手の構えで用いる者も居るとの事。
欠点としては、パワーを出すために足を強く踏み込み踏ん張ることから機動力が低い点と、攻撃的なので暗黒面に引き寄せられやすい点。

若い頃のアナキンが使用しているのは、これを発展させたドジェム＝ソ（Ｄｊｅｍ　Ｓｏ）というもの。
ドゥークーは「この型をこれ程巧みに扱う者は未だ嘗て見たことがなかった」と舌を巻いた。
（他の使い手にはサシー・ティンやエージェン・コーラーがいる）
間接の可動を駆使して腕からライトセーバーにかけて鞭を撓らせるような軌道を描かせ、より強力かつ予測し辛い連続攻撃を行う。
しかし、足元には鞭を振り回す「軸」の役割も求められるため、シエンの機動力の低さがより悪化している。

後にアナキンことヴェイダーの肉体が機械化した後は、関節の可動域や柔軟性に大きな制約が課されたため、このドジェム＝ソは不可能になった。
そこに折り合いをつけて、機械化後は本来のシエンに近い、より重い一撃を念頭に置いた所作へと戦法を変更している。

ルークもヴェイダーとの戦いを経て、自然にフォームがシエンへと近づいている。ＥＰ６ラストではシエンの本領といえる大パワーでヴェイダーを圧倒した。

オビ＝ワン同様、若き日のアナキンも彼のソレスの影響を強く受けており、攻撃的な型でありながら手堅い防御も行うようになっていた。

またソレスとは対称的な剣技である為か長所を潰し合うため、それぞれを高く同レベルで極めた使い手が戦うとお互いに決め手を欠いた泥沼の長期戦となりやすい。

ＥＰ３でのアナキン対オビ＝ワンが長引いた理由の一つがこれ。

主な使用者：アナキン・スカイウォーカー、プロ・クーン、サシー・ティン、アディ・ガリア、エージェン・コーラー、アソーカ・タノ（元々は逆手持ちだったがマスターであるアナキンの指示により順手持ちに握り方をに変えていた。後に「反乱者たち」で再び逆手持ちを取り入れている）

フォーム６：ニマーン（Ｎｉｍａｎ）

別名ランコア戦法または中庸の型。

フォーム１～５を組み合わせた型。二刀流の型ジャーカイのエッセンスを濃く取り入れたとも言われる。

フォーム７以外の全ての型の要素をバランス良く取り込んでおり、修業初期の習得に掛かる負担は少ない。

各フォームに通じることから、周囲のサポートや連携にも巧みで、集団戦向き。

共和国時代、ジェダイは外交任務を請け負って銀河中を飛び回っていたため、修行に割ける時間には限りがあった。そのためニマーンは「習得し易い型」として重宝された。

ジェダイ評議会メンバーでも習得者は多く、更には歴代最強のシス

とも言われるエグザ・キューンさえも、かつてはこの型を好んでいた。極める事さえ出来れば強い。
……本当に極められるならな。

この型の問題点は二つ。
第一の問題は、この型はあれもこれもと詰め込んだせいで、実質的に５つのフォームを同時に少しずつ修行している状態に近かったこと。
初期段階までは覚える負担は低いが、それより上の極める段階に持って行くには逆に高い負担が掛かる。才能があっても最低十年は稽古に費やさなければならないという。
第二の問題は、前述の通り、旧共和国時代のジェダイが「外交任務の片手間に」このフォームを選択した事。
忙しいから基礎習得ができた時点で満足して極めようとせず、かといって他の自分の性格などに合ったフォームへと転向して熱心に学ぶこともしない。
なまじ「使うことは使える」レベルまで行けるのも惰性を産む。

この二つの要素が重なった結果、極める事は非常に困難なこの型を半端に齧った器用貧乏な剣士が旧共和国時代には量産された、という負の側面が存在していた。
ある意味自身の適性を見極め、剣の道を究めることを怠ったツケとも言えるだろう。
先述の歴代最強シスがかつて用いていた、というのも裏を返せば歴代最強と謳われるような卓越した能力の持ち主でなければ極められないということでもある。
そのこともあって個々人の素質を重視するシス側、特に映像作品で描かれている時代のシス界隈では「器用貧乏な型」として習い使用する者はほぼいない。
そして怠惰の証であるかのように、ＥＰ２のジオノーシスの戦いでは、このフォームを使うジェダイはほぼ全滅し、実戦での脆さが露呈

してしまった。
ルーカス以下制作陣のメッセージとしては「全部乗せをパーフェクトだと思い込んで安易に選択するとこうなる」といった所だろう。
……まあ、ジオノーシス戦は他のフォーム使いを含める参戦したジェダイの九割が戦死したので、ニマーンだけに問題があったとも言い難いが……
しっかり鍛錬したシャアク・ティは生きて突破しており、決して通用しない型ではない。

主な使用者：シャアク・ティ、コールマン・トレバー大先生、エグザ・キューン

ジャーカイ（Ｊａｒ，Ｋａｉ）
二刀流の型。フォーム６の派生とされる場合もある。こちらは極め難いというわけでもないようだ。
片方を攻撃、片方を防御に使うのが基本だが、両方で一気に連撃を叩き込むことも。
ＥＰ２で負傷したオビ＝ワンからアナキンが二本目を受け取って使ったりと、二刀流の登場シーンは意外と多いが、それら全てがジャーカイの動作なのかは不明。
強いて言うならクローンウォーズでキット・フィストーがグリーヴァス将軍に対して使ったのはジャーカイらしい。
現実における刀剣の二刀流は長短一本ずつで行うのが一般的だが、ライトセーバー剣術であるこちらは両方とも普通の「剣」の長さの刀身で行う剣術なのも特色の一つ。
稀に、『クローン・ウォーズ』シーズン７のアソーカや、レジェンズキャラのソーラ・バルクなど、長短一本ずつの二刀流を披露しているものもいる。

フォーム７：ジュヨー（Ｊｕｙｏ）

別名ヴォーンスカ戦法または残忍の型。
６つのフォーム（ニマーンの時点で５つのフォームが組み合わさっているので実質５つ）を極めた者だけが使える、究極の型。
ということだが実際は後述のリスク故のジェダイ内のみでの習得規則だろう。
静と動の相反する特性を同時に併せ持ち、極めて予測が難しい変則的な動きで相手を圧倒するので非常に強力。しかも興奮や憤怒といった激情まで織り交ぜ、攻撃性を全開にする。
同じ変則的でもマカシのような洗練された美しさは見られず、むしろ「下品」「狂暴」とまで言われる。

欠点としては、ニマーン以上に習得が難しいことと、シエン以上に暗黒面に接近し過ぎること。
そのため、このフォームを学ぶことはジェダイの中でも特に精神面が練れた者だけが許される。アナキンは実際にシン・ドローリグから伝授を拒まれた。
また暗黒面に落ちかけているジェダイ（典型的なのはアナキンか）は自然とこちらに型が近づくとも言われている。
逆に、元々暗黒面に居るシスの暗黒卿はノーリスクで使える。他のフォームにも通ずる高い技術が必要な点は変わりないが、シス側ではおそらくもう少し習得条件は緩和されていると思われる。
レジェンズの設定ではあるが、古代のシスでは実際にダース・マルガスを始めとした高位のシス卿の多くがこのフォームを使用していた。

主な使い手であるダース・モールは武器が武器であるため分かり難いが、このフォームは両腕を横に広げた、一見、隙だらけな構えを取るのが特徴と言える。
「反乱者たち」のモールは長らくこの構えを取らなかったが、オビ＝ワンとの決戦の際に披露した。

主な使用者：ダース・モール、ダース・マルガス、イーヴン・ピール、シン・ドローリグ

ヴァーパッド（Ｖａａｐａｄ）

メイス・ウィンドゥとソーラ・バルクが共同考案した、ジュヨーの発展派生型。

名称はとある惑星に生息する獰猛な猛獣からつけられた。

猛獣ヴァーパッドは無数の触手を超高速で振り回して獲物を叩きのめす。それにあやかり、不規則な太刀筋と手数で攻める苛烈な型とされている。

が、実写においては役者の身体能力などの影響で別段そうは見えない。

ジュヨーよりもさらに攻撃的な性質に寄っており、あろうことかこのフォーム、防御姿勢をほとんど取らない。

基本的に下段、または中段に構え、戦闘における生死のスリルからもたらされる高揚に身を置くことで最大限に力を発揮させている。

ジュヨーと同じく両手を大きく広げる構えをとり、確かにこのフォームがジュヨーの発展形であることを物語っていると言えるだろう。

一見してシエンよりも動的であるが、アタールのような洗練された連続性は見られず、むしろ不連続な斬撃を連発する。

欠点としては、攻撃性を高めたぶん消耗が激しいことと、ジュヨー以上に暗黒面に染まり過ぎること。そのため長期戦や多人数戦には向いていない。

特に深刻なのは暗黒面へと沈むことの危険性。戦いの高揚感に身を委ねるため、暗黒面への没頭すら前提となる。

事実、この剣術の習得者は全員が暗黒面に堕ちてしまった。

メイスも例外ではなく、ＥＰ３では命乞いをするシディアスに顔を歪めながら斬りかかったが、これもヴァーパッドの影響で彼が暗黒面

に落ちかけていたからといわれる。
　因みにこの場面ではメイスはアナキンにセーバーを持った手首ごと切り飛ばされているが、スターウォーズ最強と言われ、なおかつヴァーパッドを通じて長い間暗黒面の力を使っており、まともなセーバー戦ではシディアスすら圧倒した直後の彼でもアナキンの攻撃を全くと言って良いほど予測できずに簡単に手首を切り落とされてしまったことはいかに暗黒面の攻撃性をコントロールするのが難しいのかを如実に表している。

　より暗黒面に沈めば長期戦もできるが、それをやった場合は前述の通り、制御が極端に難しくなり、暗黒面に一気に堕ちてしまう。
　短期決戦に長けると言うより、ジェダイにとって短期決戦以外でこの型を扱うのは完全な禁じ手である。
　ドゥークーは「暗黒面に没頭してこそ本領を発揮する型」とまで断言しており、ぶっちゃけジェダイ向きじゃない。

　ジュヨーと同じくシス向けと思える剣技だが、意外にも現状生粋のシス側でこの剣技を用いる者はおらず、騎士団を離反したダークジェダイか、コピーしたグリーヴァス位しか使っていない。
　創始者がメイス・ウィンドゥなので、シス側で盗んで極めることが時期的に不可能だからだが。
　一部では「ジェダイ（創始者メイス一派）が勝手に派生亜流扱いしてるだけで、シス的にはただのジュヨーの範疇に入る剣技としか認識していない」とも言われている。
（前から付き合いのあるドゥークーやシディアス、アナキン等は見知っていただろうが、既に自分の型を極めている彼等には実質無用だともいえる）。

用語説明（フォース）

フォース

あらゆる生命や自然の中に含まれる力であり、このフォースを知覚して操ることで、さまざまな超常現象を起こすことができる。一種の超能力でもある。

生命体の感情や精神の影響を強く受ける特徴がある。

自分に内在するフォースに関しては、アニヲタ的に言えばＨ×Ｈのオーラが近いと言ってもよい。

しかしフォースの本質は、自分以外の森羅万象にも満ちている、言うなれば大気にも近い存在である点が決定的に異なる。

本来どこにでも存在し、誰もが持っており、干渉もできる力であるが、目に見えないこの力を認識するためには特別な素質や訓練が必要となる。このフォースを操るものたちをジェダイあるいはシスと呼ぶ。

（厳密には、作中でフォースを操る者がだいたいどちらかに所属しているだけで、ジェダイでもシスでもないがフォースを使える人物というのもけっこういる。

暗黒面に落ちてジェダイの戒律も破棄したが、シスにも所属していないという「ダークジェダイ」もその一つ。

フォースを操る者自体を差す単語はあいまいで、非公式に「フォース感知者（Ｆｏｒｃｅ－ｓｅｎｓｉｔｉｖｅ）」「フォースの使い手（Ｆｏｒｃｅ－ｕｓｅｒ）」と呼ばれることもある。

フォースの力を引き出すには、ある種の精神修行や独自の技術が必要となり、フォースに精通した者たちは研鑽を続けてきた。

感情に起因する力であるぶん、大きな感情の揺らぎに伴って大きなフォースを操ることも可能だが、より高精度で強大なフォースを制御するには、相応の自制心が必要となる。

フォースを扱う上で絶対的に欠かせないのは、強い意志と集中力である。

熟練のジェダイはたやすくフォースを扱っているように見えるが、

実際にはそれは精神修行によって鍛え抜かれた精神力が成せる業なのだ。
そして、後述のミディ＝クロリアンなどの先天的な要素もあるが、なによりジェダイにとっては、精神を集中できる環境と時間が必要になる。
そのため、低レベルの電撃などの刺激や、酸素不足などの肉体的苦痛を伴う状況は精神集中を乱し、フォースの繰りを困難にするため、ジェダイたちにとって一番の敵である。
巷で言う奥義ブラ＝サガリなどのように、不意に辛うじて崖にぶら下がっているような苦境に立たされて尚、冷静に精神統一してフォースを繰ることができるのは、よっぽど成熟したジェダイのみと言ってよい。

逆にシスが教えるように、苦痛やそれによる憎悪、激情をバネとして、フォースのパワーをより強く引き出す方法も存在する。
ドゥークー伯爵はサヴァージ・オプレスにわざと電流を流して苦痛と激怒を引き起こさせ、その状態で精神を集中させることで、より強大なパワーを引き出させた。
しかしこれはあくまでパワーだけで、そのパワーをうまく洗練して効率的・集中的に使うにはやはり精神修行が必要。
サヴァージのように脳筋気味で精神的な集中力に欠ける場合、シスでもそのフォースの技は雑になる。

フォースを操る者たちの多くは、後述のように、自分自身のフォースを引き出すか周囲のフォースを自身に取り込んで身体を強化し、周囲のフォースに干渉して念動力を引き起こすことで、戦闘や問題解決の手段としている。
いわばいかにフォースの流れに上手く乗るか、という性質のフォースの繰りである。
しかし、真にフォースに精通した者同士の戦いでは、そうしたフォースと一体になって身を委ねるだけの姿勢は、戦いにおける序の

口に過ぎない。

この次元に達すると、その力の源たる周囲を取り巻くフォースの流れそのものをいかにして自身の支配下に置くか、いわばフォースの制空権の争奪戦に突入する。

この争奪戦に敗北してしまえば、自分はフォースの流れに身を委ねて上手く力を引き出しているつもりだが、実際には相手が生み出したフォースの流れに翻弄されて、相手の掌上で転げ回っているだけだった。という事態に陥りかねない。

相手がフォースを動かす原動力でもある、感情の機微をいかに理解できるか、という人間の精神と、それを通じてのフォースへの理解度が、勝敗を分かつ要因となる。

フォースを操る素質は、細胞に含まれるミディ＝クロリアンという共生生物の数値が重要になってくる。

アナキン・スカイウォーカーはこのミディ＝クロリアンによって生まれたとされており、ずば抜けて高い数値を持ち、強力なフォースを操ることができた。

しかし全身火傷による肉体の損失によってミディ＝クロリアンも大幅に減少し、ダース・ヴェイダーとなったときにはその力も大きく失われてしまった。

また、元来生命や自然の中に存在するものなだけに、人工物である機械との相性は最悪。

細胞一つ一つが生物であるヒューマノイドよりも遥かに干渉しやすく、例えば戦闘中にドロイドを念動力で吹き飛ばしたり浮かせるのは、同じことをヒューマノイドに仕掛けるよりも比較的容易である。

しかし、自分の手足など身体の大部分が機械に置き換わっている場合、身体にフォースを行き渡らせて加護を受けることに慣れたフォースの使い手にとっては、一挙手一投足に違和感が伴い動き辛くなるなど、大きな支障を来す。

これもまたサイボーグとなったヴェイダーの力を削ぐ大きな要因となっている。

ユニファイング・フォース（統合のフォース）はフォースの本来の姿でこれは野生動物や純真無垢な知的種族の思考を見ることで最もよく理解することができる。非知覚生物には善悪や明暗の概念が存在しない。

多くのフォース・ユーザーは、主観的な自我を振り払い、自然と一体となることでユニファイング・フォースの探求を行った。

ユニファイング・フォースは、自身の内に存在する光と闇を自然界のバランスが存在する場所まで統合させることで使用可能となる。

このとき使用者は意志を完全にフォースに委ねた超越的な状態を向かえ、ユニファイング・フォースそのものとなるのだ。

この出来事が実際に発生した有名な例は、オニミと戦った際のジェイセン・ソロである。

オニミによって致死の毒を与えられたジェイセンは非常に平穏な状態だった。

穏やかにフォースに身を委ねたジェイセンは超越的な状態へと移行し、そこで彼は自我の死を経験したと評され、選択と結果、善と悪、光と闇、生と死といった概念を超越したのである。この間、彼は決して破壊できない癒しの光と呼ばれたのだった。

本来のフォースの使い手のあるべき姿。

フォースは光はアシュラ、闇はボガ等様々な呼び方があるがそれは森羅万象の神力以下の上位エネルギーを現す。

フォースはダサミアの魔女の使う魔術のエネルギーにも使えた事により基本の下位エネルギー気力、魔力、霊力、念力の複数のエネルギーの集合体、通常の力と違い扱いの難しい上位の力なのでその為にフォース感応者の中でも選ばれた者にしか使えない代物でその力により意志の弱い者は力に流され溺れやすくなり傲慢になる。

フォースも使う人間によって変わり人の身では全てを完全に使いこなすのはほぼ不可能。

フォースがもたらす力

作中ではフォースによってさまざまな力が発揮されている。

未来予知

「その子の未来は曇っておる」

別名フォース・ヴィジョン、白兵戦における瞬間的な先読みから、遠い未来のことを見通す未来予知まで、ありとあらゆる事象を見通すことができる。

多くは、森羅万象が干渉することで常に影響を受けるフォースの流れの変化を読み取り、それを観察および考察して、次に起こる出来事を読み取る。

つまり「未来を見ている」というよりは、「現在の情報を正確に分析したうえで、状況から辿る結果を予想する」、一種の高速演算に近い。

予知夢として、意図せずに具体的な光景として未来を見る者もいる。この予知夢を見るジェダイは太古には少なからずいたようだが、２０ＢＢＹごろにはその能力を持つジェダイは極限られた存在となっていた。

しかし決して万能というわけではなく、予知を行う者の願望が反映され都合良く切り取られた未来が見えてしまうことや、後述するダークサイドの妨害によって未来を見る目が曇ってしまうこともある。そうでなくても予知した未来までの過程がすっ飛ばされて見えてしまうため、未来を見ることができてもそれを解釈することが何より難しいとされている。

悪い未来を予知したのでそれを防ぐために行動したところ、予知通りの結果やより悪い結末を招いてしまうこともある。

このように未来を見ることは危険を伴っており、クワイ＝ガン・ジンや後のヨーダは未来にばかり目を向けることの危うさを説いている。

なお、未来は常に変化しているため必ずしも予知した通りの未来が訪れるとは限らない……とされているのだが、実は作中で予知が覆った事例はほとんど存在しておらず、後述の「狭間の世界」のように未来が初めから決まっているかのような描写も存在する。

このことと合わせると、作中で語られる「未来は常に揺れ動いている」とは実際は「未来予知の解釈の難しさ」を示すための言い回しなのかもしれない。

念動力

手を触れずにものを動かす能力。

・フォース・プル

物体や相手をフォースの引力で引き寄せる技

・フォース・プッシュ

物体や相手をフォースの斥力で飛ばす技

・フォース・チョーク

対象物をフォースの念力で自在に動かして浮かせたり、相手に当てる技

・フォース・グリップ

見えないフォースの手で対象の相手を持ち上げ首を絞めて窒息させたり、ドロイド並みの強固な物を握り締める動作で潰して圧壊させる事が可能、拷問や拘束にも使える

用途はさまざまで、遠くにあるスイッチの開閉や、戦闘中に手放したライトセーバーの回収、物をぶつけるなど。賭けのイカサマや女性を口説くのにも使える。

動かす力はフォースを操る力量によって異なり、未熟な場合はちょっとした荷物を持ち上げる程度が限界だが、達人ともなると沼地に沈んだ戦闘機を持ちあげたり、高速で相手に投げ飛ばすくらいは楽にこなす。

時間をかけて全神経を注げば、戦艦を破壊することすら可能なほど強力になる。

グリーヴァス将軍がこれで吹っ飛ばされる⇒ぐおおおおお!!　⇒ゴキブリスタイルでシャカシャカ逃げる

の流れは様式美。

ジェダイの常套手段として比較的周知されているため、対ジェダイ

を想定する場合には、強力な磁石などによってフォース・プッシュの対策をドロイドに施す例もある。

その他、自身が落下したり、搭乗機が墜落した際にも、落下速度を和らげて衝撃を緩和するのにも利用できる。

では、空中浮遊や飛行は可能か。と言えば、一応不可能ではない。

ただし、小説版での言及になるが、ＥＰⅡのオビワンも、高低差数百メートルの位置から落下してる最中には、さすがに速度を落とし切れずに地面に激突死すると判断していた。

ＥＰⅥで反応炉に投げ込まれた皇帝の場合、フォースで浮かんで戻ることも不可能ではなかったようだが、ヴェイダーは生命維持装置が壊れて瀕死だったにも関わらず、彼が死力を振り絞ってフォースで妨害し続けた結果、そのまま成す術無く落下して死亡した。

その他レジェンズでもフォース・フライトという技を使うジェダイはいるが、これは大ジャンプに近い。

フォースの強いジェダイその人が、重力に逆らって自身の窮地を咄嗟の浮遊で脱するのは、かなり難易度が高くおいそれとできる芸当ではないらしい。

探知

念動力と並び、ジェダイの代表的な業である。

フォースと一体になったり、自身のフォースを周囲に投げかけたりして、周囲の状況を把握することができる。

深く集中すれば、戦闘宙域一帯のあらゆる物体の位置関係を把握でき、砂漠の中から小さな生物を探す芸当はもちろん、卓越した使い手ならば、何光年も離れた対象の座標でさえ大よそで特定してのける。

通信による座標の特定、という大きな補助はあれど、何光年も離れた部下の位置を詳細に特定してフォース・グリップで首をへし折る、などという所業を実現できるヴェイダーやシディアスらシスの暗黒卿は、神業と言っても過言ではない。

それ以外にも、密林地帯にいるときに、自身のフォースを飛ばして

周囲の環境を探り、ひどい獣道を避けて一番楽に歩ける道を探るなどの利用法も可能になる。
とは言え、この能力も常に万能とはいかず、不覚にも精神統一できない状況では索敵範囲や精度も大きく落ちる。

身体能力の強化
脚力や腕力の強化。
フォースによる高速移動のフォース・ダッシュ、フォースよる跳躍フォース・ジャンプ、フォースによる二段ジャンプ技フォース・フリップ等主には自身の内なるフォースを呼び起こしたり、周囲のフォースを取り込んで、体内に溜め込み強化する方法を用いる。
機械等による義肢にはこの方法は使えないが、上記念動力の応用で義肢の動作を補助してやれば疑似的に身体強化の再現は出来る。
作中で発揮される大ジャンプなどはこの恩恵。また、ヨーダやダース・シディアス、ドゥークー伯爵といった老人が作中で凄まじく動き回っているのもこのため。
熟達したジェダイマスターであれば握力で岩を握り砕くことも容易い。
治療
上記身体能力強化の延長にあたる技術。
別名フォース・ヒーリング、自身に対して自律的に心身を回復させる効果は無論、毒への抵抗を高めたり鎮痛効果を発揮させ治癒力を促進させることは、高練度のジェダイであれば、時間さえ十分にあれば造作も無い。
他者に対しても高度な医療設備が無いと不可能な施術をフォースで代用することも可能。
ただし、これは対象となる生物の生命力をリソースとするため、衰弱し切っていると手の施しようがない。
加えて、フォースによる適切な治癒力活性化や施術をするにはその生物の肉体の構造を知っている必要があるので、
この術を他人に扱えるのはジェダイの中でも医学の知識を持つ者

に限られる。
そして何より、作劇的な利便性を抑制する為だが、フォースによる治癒も効果を発揮しなくなる。

ダース・プレイガスは長年の研究によりこれを極め、肉体の再生治療はもとより若返りや死者蘇生までやってのけている。
プレイガス曰く「死んでも霊体になって生き延びるなんてのは邪道。一度も死なない者を不死というのだ」とのことで、これがその秘法とされる。
またレジェンズ小説「帝国の影」では、ヴェイダーが長年の修行の末、短い時間ながら完全なる呼吸を取り戻す場面がある。
当然この時点でヴェイダーは細胞組織を完全に焼かれていたのだが。しかもヴェイダーは「もっと修行を積めば、この呼吸も肉体も完治させられるだろう」と実感してもいた。

フォースの壁
読んで字の如く、フォースによって見えない壁を造る。念動力の近縁とでもいった技術である。
レジェンズにおいては、エネルギーを吸収して拡散させる技法と定義している。
かなり強いフォースが扱えないとこの芸当を実用的な域にまで上げることは困難だが、
シスとしての技巧を修得したヴェイダー卿は、片手をかざすだけでハン・ソロのブラスターピストルのビームを防いだ。
より高出力なブラスターライフルを反射させる高等技術を実戦において使用していた。

人知を超えた存在である後述のザ・ワンズに至っては、ブラスターとは比較にならない出力のライトセーバーであろうと、その刀身を腕でたやすく防いだり、素手で掴んで無理矢理仕舞い無力化する、といった業すら可能とする。

読心術

他人の心を読む力。

別名フォース・エコー、感情の起伏の影響を受けたフォースの揺らぎを認知する、といった仕組みのもので、深層心理に干渉する。

感情の動きを読み取っている以上、相手が強固な意志で感情を抑えている場合は読みとることができない。

固い絆がある者同士なら、遠く離れていてもこれで交信ができる。

正史（カノン）では、一部のジェダイは物に秘められた記憶を読み取ることもできるとされている。（センス・エコーと呼称されることも）

また、バイオチップなどで本人の意思とは関係なく行動させられている場合やその行動に対して特別な感情を抱かない場合、

殺意等の感情の変化自体が存在しない分、反応がどうしても遅れがちになる。

これが原因でジェダイはクローン兵の裏切りを察知することができず滅亡に繋がっている。

後年の作品である「クローンウォーズ」にて、このことが掘り下げられている。

マインドトリック

他人の心を操る能力。

尋問の際に自白させるのにも有用。

作中では見張りや検問を追い払うのによく使われているが、誰にでも通用するわけではなく、強固な意志を持つ者の心を操ることはできない。命令に従っているだけの下っ端やチンピラなんかにはよく通じる。

意志の強いヒューマノイドが相手でも、極めて強いフォースで働きかければ、強引に自白させるなどの強制力を発揮するが、これはジェダイであっても誰にもできることではないし、

対象にも多大な負担をかけるので、ジェダイはこの使い方は極力避ける。
……あくまで極力である。例外として、凶悪犯罪者のキャド・ベイン相手に、切迫した状況で評議員メンバーがやったことがある。
拷問じみた苦痛を彼に与えていた。そこまでして結局失敗した。

その他、雑踏の中でも周囲の気を自分以外の別の対象へと反らして、自分の存在を悟られにくくする、といった応用的な技法もある。
また、種族として耐性を持つ場合もある。メタいことを言うと簡単にマインドトリックが通じると物語的に困るキャラはそんな種族であることが多い。

テレパシー
他者の精神への干渉能力の応用として、遠く離れた者とフォースを通じて会話する。更に発展するとビデオ通話のように互いの姿を見ながら会話したり、言語を持たない動物に意思を伝える事も可能。
フォース・ライトニング
指先から青白い稲妻を放出して敵を攻撃する。
シスの暗黒卿がよく使う攻撃手段であり、暗黒面のフォースによる破壊の力である。
これを使った以上はすなわち暗黒面に堕ちた者、と断定できる訳ではないが、かなり強い負の感情を引き出さねばならないため、生粋のジェダイがまともな精神状態で使った例は無い。一応、使うだけならまともなジェダイでもできるが、パワーが大きく落ちるという記述もある。

フォースによって素手で受け止めることも理論上は可能だが、ヨーダくらいの強力なフォースの持ち主でもない限りは実践は不可能。
ライトセーバーで防ぐこともできるが、真の暗黒卿が行使する稲妻は極めて強力なためにライトセーバーがたやすく手から弾き飛ばされてしまうので、いずれにせよフォースによる身体能力の強化などは

欠かせない。
また、本編においてこの技で直接的に誰かを死に至らしめたことはない。メイス・ウィンドゥは直撃を受けたが、窓から摩天楼に吹っ飛ばされた瞬間に悲鳴を残しており、電撃が直接の死因ではないと思われる。
ただしこれに関しては、シディアス卿は相手を嬲るためにわざと威力を落としているためでもあり、フォースの抵抗力がない生物がこの稲妻を受けると、あっさりと焼死体が出来上がる。

霊体化
フォースがたどり着くひとつの極致。
死後フォースと一体となり、霊体となって永遠の存在となること。
クワイ＝ガン・ジンが死後に習得してあの世から意識のみだが帰還しており、オビ＝ワンやヨーダはその教えを受けさらに発展させ、霊体として存在を維持できるようになった。
アナキンはその教えを受けたわけではないが、フォースによって生まれた彼は自然と行うことができた。

正史（カノン）とレジェンズ共に、シス卿も真似事は出来る。
生者への干渉力、と言うより有害度はジェダイのそれより高いものの、ジェダイの霊体と違い、特定の地に活動圏が限られる地縛霊、もしくは特定の物質に憑りつく悪霊めいた存在でしかなく、ダース・ベインの地縛霊はヨーダに一蹴されている。

その状態から肉体を再生させて生き返っちゃうシスも出てきたけど。

天候操作
雷雲をフォースで操り雷を落とす。
こちらもフォースの極致にあると思われる技術の一つであり、ＥＰ８におけるヨーダの霊体や後述のベンドゥのような、ある種の逸脱し

た存在しか行った描写はない。
ヨーダは巨木を焼き払い、ベンドゥは帝国軍の地上部隊に壊滅的な打撃を与えるなど、当然その威力規模は桁外れ。
レジェンズにおいては、シスの暗黒卿の極致としてフォースの嵐という形で力を行使する場面もあるが、扱いを誤ると自滅する危険な技である。

物体の転移
フォースを通じ空間を越えて――場合によっては時間すらも越えて、物体や生物が転移する。「能力」というよりは「現象」に近い力であるが、作中では複数回発生している。
顕著な例は強固なフォースの絆で繋がる「フォース・ダイアド」であるレイとカイロ・レンでありＥＰ８やＥＰ９ではその斬新過ぎる描写で視聴者に衝撃を与えた。
これと全く同一の現象であるかは不明だが、『反乱者たち』のとある回では惑星ロザルにて北半球から南半球へ一瞬で移動する現象が起こっており、後述の「狭間の世界」の入り口がロザルにあることと無関係ではないと思われる。

瞑想
瞑想とは、生き物が心を落ち着かせるために行う精神的な技法である。フォース＝センシティブは瞑想によって深い平静状態に達し、精神を研ぎ澄ますことでフォースとの繋がりを得やすくすることができる。また、瞑想はフォースのヴィジョンのきっかけになることもあった。フォースに心を開く瞑想の技術は、最長老のジェダイ・マスターですら生涯かけて学び得るもの。ジェダイの瞑想技術が心を落ち着かせてフォースと繋がりを得るものであるのに対し、シス卿は瞑想によって自らの心の中にある怒り、恐怖、憎しみを冷酷なパワーの純粋な一点に集中させる。
フォースの投影
フォース感応者が使う能力の１つに、離れた場所に自分の姿を投影

する技術がありフォースによって映し出された幻影は周囲の環境と物理的に接触することができる。しかしその実態は単なる幻であるため、レーザーの集中砲撃を受けても全く無傷のままであったり、ライトセーバーの剣撃が体を素通りしたりと、普通ではありえない事柄を現実のように見せることが可能また、フォースの投影はありのままの自分を映し出すのではなく、外見を若返らせたり、自分にはない物を幻影に持たせることも可能、幻影は無形の存在でありながら他者と触れることができる。

但しこの技を使った場合かなり疲弊しエピソード８のルークのように最悪命を落とす。

リビング・フォースライトニング

ライトサイド、ダークサイドの両方を渡り帰還し知識を得て悟りを開きユニファイング・フォースを得て真のジェダイとして覚醒した者が使えるフォース・ライトニング、レジェンズで登場した技で青白い稲妻のフォース・ライトニングと違い緑白い稲妻で相手を生かす事も殺す事もできる生命体や対処物だけでなく物理攻撃が効かないフォースの霊体に唯一効果のある奥義。

緑白い稲妻で相手を傷つけずに力を封印し拘束する事も可能。

ツタミシス

ジェダイの中でも限られた者しか使えない技、ヨーダ使用した技でフォースライトニングやライトセーバーのエネルギーを手で無効にして吸収する技

この他にも作品によってさまざまな能力が登場している。

フォース・スリープ

エピソード1でクワイ＝ガンがジャージャーに使用した相手の意識を遮断させる技。

フォース・リンク［技名はオリジナル］

亡くなった者も含めて過去のジェダイ達の声を聞き力を貸してもらう奥義エピソード９でレイが使用した。

なお、現在ではレジェンズ（非正史）として扱われるが、未来を描いたスピンオフ作品には別の銀河からやってきたフォースの外にいる生命体、ユージャン・ヴォングという種族が登場する。
彼らは上記能力のうち、ライトニングのような物理的に破壊する能力以外の直接作用は一切効かない。なにこのチート。
しかもユージャン・ヴォングの持つ価値観は戦争を避けられず、ルーク率いる新ジェダイオーダーは苦戦を強いられることとなり、新共和国も一時コルサントを失った。

ライトサイドとダークサイド
フォースを語る上で欠かせないのがライトサイドとダークサイドというふたつの概念である。
明瞭に区分することは困難な感情に左右される力である以上、フォースの性質を大別することには作品内外で異論が出ているが、ざっくり言ってしまえばライトサイドは光・善、ダークサイドは闇・悪を象徴する存在であり、フォースを操る者の通念である。

ライトサイド
光明面とも呼ばれる。善意や慈悲を重要視し、他者を救うためにその力を行使する。怒りや憎しみといった負の感情を抑制し、理性や調和に基づいて行動している。
後述のダークサイドと違って、「どういう心境であればライトサイド足り得るか」という明確な定義は実際のところ無きに等しく、ジェダイは感情の無いひたすら平静な心でいること、いわば無心の境地に基づきフォースを扱うことを是としている。
ジェダイはその象徴ともいえ、彼らは銀河の平和のために宇宙の各地で争いの鎮圧や調停などを行っていた。
まさに正義の味方といった存在であるが、その正義は時に正しさへの執着や傲慢さへと繋がることにもなる。

そして旧共和国時代、あまりにも長く続いたジェダイの正義は組織

を頑迷にしてしまった。
闇に堕ちることを避けるため、負の感情から限りなく遠いところに留り、執着的な愛情の一切を手放すことに努力を割き続けた。
その結果、愛ゆえに苦悩する人間の心情も、そうした感情の末にダークサイドに堕ちた人間が操るフォースの流れも、本質的には何も理解出来ないまま、旧共和国のジェダイは自滅に繋がる道を進み続けてしまった。

ダークサイド
暗黒面とも呼ばれる。悪意や敵意といった負の感情を糧としており、己の欲望のためにその力を行使する。
ダークサイドを象徴する存在といえばシスの暗黒卿であるが、ダークサイドに堕ちたジェダイ、通称ダークジェダイも存在する。
ダークサイドの力を使う者はすなわちシスである、と認識している者は作中にもいるが、これは誤解である。
フォースの制御にはさまざまな体系的技術があり、シスはそれに関する研究を重ねてきた。
分かりやすく言えば、単なる堕ちたジェダイは怒り狂って負の感情をまき散らすように暴れるのに対して、
シスの暗黒卿は冷静に負の感情を収斂して、より広く深い力を引き出す。

古代のシスは己の感情や欲望の赴くままに行動していたが、その結果としてジェダイに滅ぼされることとなった。
その後、わずかに生き残ったシスは感情をや野心を巧妙に隠すことを学び、千年もの間ジェダイの目を逃れて力を蓄え続けることとなる。

ダークサイドの使い手にとっては、主にジェダイが扱うライトサイドの源である無心やそれに基づくフォースも理解の範疇であり、ジェダイの技術も長年研究し続けた。

単にダークサイドだけを使うというより、ダークサイドとライトサイド、双方をまとめて使っているというべきか。

それゆえに、ライトサイドの使い手よりも広いフォースを認知できると自負している傾向があり、それはある程度事実である。

これについては「暗い洞窟から外の世界を見ることはできるが、逆に外から洞窟の中を見ることはできない」と喩えられている。

設定

オリ主設定（スターウォーズ・ダンまち初期）

スターウォーズ時代
名前　アーク・ウィンドウ
種族　人間　男性
ライトセーバーの色　緑×２本
フォーム　全て使用可能　どのフォームも極めている。
転生特典
・ライトセーバー・フォースの才能（限界突破）
・成長限界がない肉体と強大な精神力
・ライトサイドの重要人物と早く会える。
・教官の才能
経歴
転生↓赤ちゃん保護・養子（０歳）
←
候補生になる、事実上のパダワンだか……（３歳）
←
特例のパダワン（５歳）
←
ナイト兼候補生教官（１２歳）
←
マスター兼候補生教官（１８歳）
←
マスター兼ジェダイ最高評議会補佐官兼候補生筆頭教官（２４歳）

←
マスター兼最高評議員兼候補生筆頭教官（３０歳）
←
この間に原作で起きた悲劇などを阻止している。
←
グランド・マスター兼最高評議会議長兼候補生筆頭教官（５０歳）
←
衰えによる議長引退　候補生特別顧問教官に着く（８０歳）
←
老衰（享年８５歳）
←
２回目の神の空間
神の不注意で死んだ少年が輪廻転生の輪の中に入るまでこの世界に合う強力な特典を貰い転生する。
転生後、気付いたら赤ちゃんの体でかごの中に入れられて路地裏に捨てられ眠ってた所、フォースの導きで来たヨーダとメイス・ウィンドウに保護される。
強大なフォースを感じた２人は施設に預けるよりジェダイにする方がこの子の為になると考え、ヨーダの提案でウィンドウの養子となる。
３歳になり候補生となったが、潜在的能力が高すぎて普通の教官では手に終えないと言うことで、ジェダイの中でも最高クラスのヨーダとメイス・ウィンドウの２人でマンツーマンで教えた。これが理由で事実上のパダワンと言われている。
２人によって鍛えられたアークは、５歳で既にナイト以上の実力を持っていたが、若い理由でなれないが特例として、通常はマスターは１人だけなのだが、様々なマスターの元で訓練を許される。　この時まだジェダイだったドゥークー伯爵にマカシや紳士としての礼儀作法、キット・フィストーにシャイ＝チョーを教わるなど鍛えて貰って

いる。
この時ひたすらに自分を鍛えてるアークを見て他のジェダイマスター・ナイト達も負けないように己を鍛える。
これが理由で原作では死ぬジェダイが強くなり生き残る。
１２歳となり既にマスター級の強さを持っていたが、経験不足という理由で、ナイトになった。パダワンを弟子に取るのだが、指導に慣れていないこともあり最初の２年間は弟子を取らず候補生の教育していくことで経験を積み重ねて、マスターとなるまでの最後の６年間でパダワンを取る。
様々な事件解決及び和平交渉と様々な活躍したアークは１８歳で最年少でマスターとなる。　また候補生とパダワン
の指導が上手いので引き続き教官となる。この時既にヨーダとメイス・ウィンドウに並ぶ最強のジェダイと言われている。
これまでの功績で２４歳で評議員になってもおかしくないが席が空いておらず苦肉の策として、各議員の補佐官として着く。　また候補生を優秀なパダワンに育て上げたことにより筆頭教官となる。かなり忙しい日々を送る。
議員の一人が引退したことで、その席に座り議員となり慣れないこともしているのと筆頭教官の仕事もしているのでとてもとても忙しい。
議員になってからこれから起こる悲劇を失くす為に行動をする。
・通商連合の船にいくクワイ＝ガン・ジンとオビ＝ワン・ケノービに議員とし着いてきてダース・モールとの戦いでは、１人で戦いシスがいる証拠として、気絶させてジェダイ評議会につれていく。
・モールを連れていきシスがいることに、驚いた評議会はグランド・マスターたるヨーダによる尋問で、ドゥークー伯爵がシスになっていることを突き止める。　ヨーダとウィンドウとアークの３人でドゥークー伯爵の捕獲に乗り込む
・激しい戦いのなかで捕獲に成功した3人はドゥークーからシスの大元であるダース・シディアスとその正体を言われる。
・ドゥークーを連れて帰還途中にアナキンの家族が危機になってる

ことをフォースで、感じた後に単独で救助にいく。　途中クワイとケノービとアナキンと出会い４人で助け出すことに成功する。
・アークの提案でジェダイ・テンプルの下に有る
古代シスの神殿を破壊して、ダース・シディアスことパルパティーン議長を捕らえる。
・本来ならジェダイは結婚は駄目だかアークが評議会を説得したので、アナキンとパドメの大々的な結婚式をする。
・アークがクローントルーパー達がいるのを評議会に報告して、すぐに現地に飛びバイオ・チップなどないか確認してから、銀河平和維持軍として契約する。
・通商連合がドロイド軍を連れて襲撃したが、ジェダイとクローン達によって瞬く間に制圧をした。
５０歳になるとヨーダから引退するからグランド・マスターの称号の授与と議長をしてほしいと言われ承諾する。
その後３０年間議長と筆頭教官をやりながらも、最強のジェダイとして、他の星が海賊などに襲われた際には最前線で戦い平和維持をしていたが衰えによる体があまりいうことを聞かないことを感じ議長を引退する。　なおこれまでの経験から特別顧問教官として、ジェダイ・テンプルで若い候補生達を導いていく。
８５歳で亡くなった。（原因・老衰）
なお彼が鍛えてきたジェダイ達によってこの後の世界も平和になっていく。
気付いたら神の空間にいた。
これまでの功績で、次の輪廻転生先では神になるのだが
人として転生の準備してたため直ぐには転生出来ないと言う。
転生の準備と転生先の何処の神に成るかを向こうの神話の神々と話し合う為に時間が出来て、それまでの間にまだ別の世界に旅立つ。

ダンまちの世界（初期）

名前　アーク・ウィンドウ
年齢　６歳
種族　ヒューマン　男性
見た目　６歳と言う割には鍛え抜かれた体で、優しい顔立ち
服装　メイス・ウィンドウと同じ服　ジェダイ・ローブ
武器　ライトセーバー　緑色×２本　連結用シャフト

《神様特典》
・ライトセーバー・フォースの才能（限界突破）
・成長限界がない肉体と強大な精神力
・ライトサイドの重要人物と早く会える。
・教官の才能
前世の特典に、ダンまちの世界に行った際に足された特典もある。

《足された特典・装備》
・リュック型の無限空間倉庫（オーディン特性なので本人または認めた人しかリュックは開けられない）
・ライトセーバーを製作する道具1式（神特製壊れない）
・オーディンの加護（同郷の神に早く会う・魅了の無効化・神造武器の使用可能）

ダンまちの世界に転生したが原作から１２年前だった。情報収集をして休憩してる時に神ロキに出会う。

プロローグ
転生

神の空間

「うっ……ここは……そうか戻ってきたのか」
真っ白一面の空間に、ジェダイローブを羽織った老人が立っていた。
するとそこに
「久し振りだのぉお主、老けたの」
声をかけられた老人は振り返ると、左目の方に眼帯をした老人が立っていた。
「それは、向こうの世界でこの年で去りましたからむしろ少年に戻ったらこっちが驚きますよ。　神様」
「そうか？　まぁいいわい」
神様は、少し笑うと真面目な表情で言った。
「向こうの世界では、凄い活躍をしたな」
「えぇ、まぁ知ってる世界だったので出来るだけ悲劇は起こさないようにしました」
老人は、胸をはって言った。　しばらく会話を楽しんでたが老人がいつ輪廻転生の輪の中に入るのかを神様に聞いた。
「所で、神様私はいつ輪廻転生の輪の中に入るのでしょうか？」
すると神様は急に土下座をした。
「すまん、お主を転生の輪の中に入れることは出来ない」　ドゲザ
神様がそう言うと老人が戸惑った様子で
「何で……ですか？」
老人が質問すると神は立ち上がって
「実はお主が行った世界での行いが原因なんじゃ」
「どうゆうことです？」
老人が聞くと神様は詳しく説明をした。
「お主、スターウォーズの世界に転生したじゃろ」

「ええ、まあそれがなにか？」
「あの世界は結構人が死ぬ事がある所なのだか、お主が色々と悲劇とかを阻止しただろ？」
「アナキンの家族を救ったり、アナキンとパドメの結婚を評議会に認めさせたり、アナキンのダース・ベイダーになるのも阻止したし、パルパティーンの正体を評議会に教えたり、オーダー６６を阻止したり、銀河帝国の建国を阻止したりと色々やりましたからね」
老人は大変だったなぁと考えていると神は
「お主が行った行動は多くの人の命を救った事だそれにその世界の未来も平和と秩序が確定したのだ。お主が教官をした時、生徒は皆優秀で誠実な人達ばかりだった。　それがお主が去った後も世界の平和と秩序を保てたのだ」
老人は自分の生徒が世界の平和と秩序を守っていると知ると嬉しそうに笑った。
「お主が多くの人の命を救ったり居なくなった後の世界も良くしたりと色々、徳を積み重ねすぎたのだ。　本来なら人間のまま輪廻転生の輪の中に入るのじゃが、お主の場合徳を重ねすぎた結果……」
「結果？　どうなったんです？」
老人が聞くと神様は言った。
「お主、神になったぞ」
「……えっ――――――――!!!!」（ 。 Д。）
老人は神様の言葉を固まったが少しして驚きの声を上げた。
「こちらも想定外での、本来なら人間の状態で輪廻転生の輪の中に入るだが神になってしまったから今は入れん」
「本当に私は神になったのですか？」
老人は信じられないと神様に確認を取った。
「それだけおぬしは良い事をしたのじゃ、ちなみに徳を積み上げたから善神の一柱になるぞ」
神様はそう言うと安心するように老人に言った。
「輪廻転生後の世界で新しい神になるのじゃが、それは向こうの神々と話し合いして調整しなければ行けないのじゃ」

老人が神様の説明聞いて安心したがあることに気づいた。
「それってまさかかなり時間が掛かるのじゃあ？」
「そうじゃ、何しろ人間が神になるのは滅多に起きないことなのだ、特に転生直前ともなると前例がないからのぉ向こうの世界の神々との話し合いもそのためじゃ、そこでじゃ」
神様が、そう言ったのでまさかと老人は思った。
「話し合いが終わるまで、もう一度別の世界に行ってくれぬか？」
「やっぱり、そう来ましたか分かりました。　いきましょう今回もルーレットで？」
老人が神様に聞くと違うと否定をして
「今回は前回の世界の経験を活かせる場所を選べる」
そう言うと神様はホワイトボードを出した。
「ええっと行き先は、こんなものじゃな」
神様は、老人に行き先を書いたホワイトボードの面を見せた。
・ダンジョンに出会いを求めてるのは間違っているだろうか
・エースコンバット（自分でシリーズを選べる）
・ソードアート・オンライン
・暗殺教室
「こんなものじゃな」
老人は書かれた転生先を見て懐かしいと感じながら何処に行くか考えていた。
（うーん、エースコンバットだとジェダイファイターの経験を活かせるけどライトセーバーの活躍が無いかなぁ、ソードアート・オンラインは電脳仮想空間で体は動かせないからなぁ、暗殺教室はライトセーバー使えるけど説明や政府とかに狙われそうだから面倒だな、ダンまちだと充分に使えるか、なら）
老人は、行く先を決めると神様に言った。
「じゃあダンジョンに出会いを求めるのは間違っているだろうかの世界に行きます」
「分かった、ダンまちの世界じゃな」
神様は、転生の特典の確認をとる。

「ダンまちの世界には、前世の技術・経験・肉体とライトセーバー2本とダブル＝ブレード・ライトセーバーにするためのシャフトと後は、弟子が出来た場合に備えて訓練用ライトセーバー多数と、卒業した後の一人前になった際に自分で作るライトセーバーの筒とカイザークリスタルをこれも大量に持たせよう、但しXウィングとか航空機は持っていけないこれはあまりにも世界観が違いすぎるかのぉ」

老人は中身に頷くと神様は老人に、注意することがあると言った。

「転生する際は6歳から転生となるが、技術と経験はそのままでも大丈夫だか肉体の方は全盛期の身体能力を持つと肉体が壊れるから、押さえるぞ、12歳辺りから全盛期になるぞ」

「分かりました」

老人が了解したので、神様は転生の準備を始めた。

「転生の準備を始めるのだが、今ちらっと世界を見たのだがわしの同郷の道化の神と同じ名前を持つ女神が降りてきてからかなり立った頃のようじゃな」

（道化の神？　それってロキだよねそれに同郷ってまさか……）

老人は話を聞いて目の前の神に確認をとる。

「神様はロキの事を同郷って呼びましたよね、それにその目に眼帯、まさか神様は北欧神話の主神オーディン様ですか？」

老人が聞くと神様は

「おおっ、そうじゃ全く自分の名前を言ってなかったのぉ」

そう言うと神様は自己紹介をした。

「わしの名は北欧神話の主神オーディンである。　まぁそんなに畏まらなくても良いぞ」

老人は驚き頭を下げようとするとオーディンに止められいよいよ転生の準備が整った。

「じゃああの扉を開けるとダンまちの世界に行くぞ」

「じゃあ行ってきます」

老人は扉を開けて入る前に、オーディンに言った。

「オーディン様、ではまた後で」

「おう、また後での」
そうして老人はダンまちの世界に行った。

ＳＩＤＥ　オーディン
今扉を通り抜けて、新しい世界に行った奴を見て、
「あっちの世界に転生した時に、そばにカイザークリスタルなどのアイテムが入ったバックを置いておくかのぉ、　それとあっちは神が大量にいるからワシの加護を分けておくかの」
次にこの空間で合うのが楽しみじゃな

本編・原作前　ロキ・ファミリア入団
第1話　新しい世界・神ロキとの出会い

扉を通り通路みたいな所を歩いていると、急に眩しくなり眼を閉じ、暫くしてから眼を開けるといつの間にか森の中に立っていた。どうやらオラリオの外みたいだな。

「無事転生出来たか……」

自分の体を見てみたが、やはり6歳時の体に、今の体に会った義父であるメイス・ウィンドウと似てる服に腰回りのベルトにライトセーバーが2本と腰の所にダブル＝ブレードライトセーバーにするための連結用シャフトが着いておりジェダイロープを着ていた。　辺りを見渡すとリュックが置いてあり、近くに寄ると開け口の上に手紙がおいてあった。

手紙を開けると。

『これを見てるということは無事に転生出来たということじゃな、そのリュックはワシが特別なものでの見た目は普通だが中に無限の空間なっていてに入れるようになっている。　ライトセーバーの材料と製作する際の道具、弟子が出来た際に訓練の時に必要になる大量の装備に、後はお主の今後身長が高くなるのを見て、今着ている服を小さいやつから大きいやつまで大量に入れておる。後はこの世界でのお金が入っておる。　取り出す際は欲しい物を念じれば出てくるぞ、後知っておるとは思うがそっちでは神々が降りておるからお主の経歴だと格好の的になるからワシの加護を与えたぞ、これで終わりじゃ、また後であの空間で会おう』

オーディン様色々ありがとうございます……

やはり体が縮んだせいか、動きにズレが感じる。　何処かで、ブレを失くすように調整しないと、森の中を歩き暫くすると、開けた場所に出たので端の方にリュックを置き開けた場所の真ん中に立ち、ライトセーバーを取り出しスイッチを入れて、『ピシュー』と独特の音を

出して緑色の光刃が出たのを確認してから、最初の型《フォーム》シャイ＝チョーの構えをして振り始めた。
あれから、全てのフォームで動いて体の感覚のズレを失くしたが、ライトセーバーとフォースの技術は、全盛期と変わらないが、やはり身体能力が6歳の時まで落ちていた。　まぁフォースの身体能力強化で何とかなるのだが、体が大きくなるのを待つか。
体のズレを直しそろそろオラリオに向かおうとリュックを背負いフォースで、身体能力を上げて森の中を疾走した。
少し、いやかなり速く走っていると整備された街道が見つかりその道を走っていると、円形型の都市が見えてきた。
「あれが迷宮都市オラリオか、随分でかいな」

オラリオは世界で唯一「迷宮」が存在する円形の都市であり、都市は堅牢かつ巨大な市壁に囲まれており、外周ほど高層の建造物が多く、中心ほど低層となり、中心部にはバベルが聳える。都市の内部は、その中央から八方位に伸びた放射状のメインストリートにより分けられた八つの区画から構成されている。
「さて、一番近い入口は北側か」
入口に向かうとそこにはオラリオに入ろうとする人達で行列が出来ており、並んでいると前の人達が先に進み門に辿り着いた時に門番をしてたであろう憲兵に呼び止められた。
「君、オラリオには何の用で来たのかな？」
「冒険者になるためにです」
すると憲兵は、少し険しい顔になって、
「今のオラリオは、少しピリピリしててね中に入っても気を付けてね」
「はぁっ、ありがとうございます」
憲兵に注意され、門を潜るとそこには、人間・小人族・エルフ・アマゾネス・ドワーフ・獣人など様々な人々がいだが、憲兵の言ってた通り活気が余り無く空気がピリピリしてる。
「これは……情報収集しないと駄目か」
今どの時代なのかとこの空気になってる原因を調べるために北の

ストリートを歩いていった。
それから、情報を収集してるとロキ・ファミリアにはまだアイズが居ないことが分かった。　居ないということは原作から7年以上前になるな……　確かこの時期は闇派閥という過激派ファミリアがいて、ゼウスとヘラのファミリアが壊滅した後、秩序の崩壊や破壊工作を繰り返してオラリオに混沌をもたらしていたんだよな、そりゃあ空気がピリピリするのも分かるな、少し前にもガラの悪い冒険者がいたし……　情報収集していると小腹が空いたので名物のじゃが丸くんうす塩味を買って近くにあった広場の椅子に座って食べていると、声をかけられた。
「ちょっと、ええか」
振り替えるとそこには、糸目がちの朱色の瞳と髪が特徴で、独特な言葉で喋る女性の人がいた。

あれ？　この人いや、神様かロキ・ファミリアの主神である神ロキがいた。

ウチは今、目の前におる子供に話しかけておる。
さっきまで野暮用で外を歩いてたんやけど、用も済ませてホームに帰ろうとしたんやけど、目の前の広場で椅子に座ってじゃが丸くんを食っとる小さい子供がおってな、このご時世闇派閥の糞どもが、治安とか秩序を悪くしとるからなぁ、こんな小さい子供が1人でいると何をされるか分からんからなぁ。
それにしてもよ～く見るとウチが天界で所属しておった【アースガルズ】の主神オーディンの加護を感じるなぁ、あの神下界に降りてきたこと一度もないのになぁ、かなり気になるから話しかけてみよか。

「ちょっと、ええか」

何でこんなところに神ロキが？　いやそれより話しかけられたから返事しないと……

「はい、なんでしょうか？」

「いやぁ君のことを見たら興味をもったんや　そうそううちの名はロキっちゅうんやよろしゅうな」

「よろしくお願いします。　それにしてもロキ・ファミリアの主神に興味を持たれるとは、驚きました」

本当に驚いた。　だから神ロキも本当だと分かり、

「驚かせてしもうたか、悪かったなぁ」

「いえ、大丈夫です」

ロキが謝ってきたので、自分がそう言うと、

「そうかおおきにな、あっ隣座るで、それとな聞きたいことあるんやけどええか？」

「ええ　大丈夫ですよ」

神ロキが座ってから確認を取ってきたので、大丈夫と言ったら回りを見渡してからこっちを見て、

「自分親はどうしたん？」

私の見た目のせいか親が居ないことに不審を持ったらしい、まぁいいか正直に言おう。

「私には、親はいませんよ」

神ロキに言うと、彼女は申し訳なさそうに、

「そ、そうか悪かったなぁ」

「いえ、大丈夫ですよ」

私はそう答えたのだが、悪い事を聞いたと思ったのか神ロキが謝ってきた。
大丈夫と答えたら神ロキは安心した様子だった。
すると神ロキが真剣な表情で聞いてきた。
「それとなもう一つ気になることあるんや……」
「はい、何でしょうか？」
「自分……オーディンという神に会ったことあるか？」
「!!　……ええっ、あります」
何故気づいた？　こことは別の世界の神なのに……もしかして同郷の神だから気づけたのかか……
「ウチの主神であるオーディンはな、下界には降りてないんや、それなのに会ったばかりではなく加護まで貰っとる自分何者なん？」
神ロキがさっきまで、さっきまでおちゃらけた様な声ではなく低い声で言ってきた。
これは言わなかったら後々面倒なことになるな、話した方がいいか
「分かりました。話しますがここでは言えません」
ここは広場で、回りに聞こえてしまう今から言うことを他の神に聞いたら大変なことになる。
神ロキも感じ取ったのか
「かなり重大な話しになるみたいやなぁ、せやウチのホームで話すか？」
神ロキが、提案してきた。　ふむロキ・ファミリアのホームか、あそこなら大丈夫か。
「分かりました。そこに行きましょう」
私とロキは、話し合うために椅子から立ちストリートへと向かおうとするが、自己紹介を忘れてたので、
「自己紹介が遅くなりまして申し訳ありません、自分の名前はアーク、アーク・ウィンドウと申します」
「そうか、アーク・ウィンドウってちゅうんだな、アークと呼んでもええか？」
「もちろん構いませんよ」

私は、神ロキと握手をすると、
「ほな、行こうか」
「では行きましょう」
私と神ロキは一緒に、ロキ・ファミリアのホーム【黄昏の館】に向かって歩き始めた。

第2話　黄昏の館・衝撃の過去・勧誘

今私は、ロキと一緒にロキ・ファミリアのホームである【黄昏の館】に向かって歩いている　ロキがオーディンの加護を説明するために行くのだか、道中ロキとの話し合いで、ゼウス・ヘラファミリアは、3年前に滅び、今はロキ・フレイヤファミリア2大最強のファミリアとなっている事が分かった。　ゼウス・ヘラファミリアが滅んだのは原作から15年前だから今は12年前か、

ロキとの話し合いで今の時代が分かった所で、

「着いたで～」

到着したようなので話をやめて、顔を向けるとそこには、まるで城の様な作りをしており、複数の高い塔がある。　これがロキ・ファミリアのホーム【黄昏の館】である。

立派だなと思っているとロキに呼ばれたのでついていくとと館の門の前で、門番している2人の内一人とロキが話してた。

「お疲れ様です。　ロキ様用は済んだのですか？」

「済んだで、後客人を連れてきたで～」

「客人ですか？」

門番の人が、私の方を見て、

「まだ幼い子供じゃないですか」

「まぁ色々聞きたいことが有ってホームで話し合いをしたいから連れてきたんや、ちゅーことで早く門開けてぇな」

ロキがそう言うと門番が

「分かりました。開門!!!」

門番の声に直ぐ門が開いて、2人で門の中を通り、通路を歩きエントランスホールに入ると、2階に登る階段の所に、深緑の長い髪で仙姿玉質な容姿のエルフの女性が立っていた、私はロキの影に隠れているのか気付かれていない、　あの人確かロキ・ファミリア副団長で確か……、私が考えていると2人は話し合っていた。

「ロキ、今戻ったのか用は済んだのか？」

「おうバッチしな、あと人連れてきたで～」
「人？　何処にいる？」
　エルフの人は疑問を持ちながらも階段から降りて来て、私の事を見たとたんロキに鋭い眼で見た。
「ロキ……こんな小さい子を何処から、まさか誘か」
「ちゃうちゃう!!　誘拐なんかしてへんてちょっと気になることあるから連れてきたんや」
　エルフの人があらぬ疑いをしてきたのでロキが慌てて違うと、ため息をはいた後、こちらを見た。
「すまない自己紹介が遅れたな、私の名はリヴェリア、リヴェリア・リヨス・アールヴという、二つ名は【九魔姫（ナイン・ヘル）】で、このロキ・ファミリアの副団長をしている」
　リヴェリアさんが自己紹介したのでこちらも返事ををしようとした時ロキが、リヴェリアさんが言っていない事を言った。
「ついでに言うとな、リヴェリアはエルフの中でもハイエルフと言われる奴でな、エルフの王族やで」
　王族と言われっい、
「私の名はアーク、アーク・ウィンドウと申し上げます」
　前世で、外交官として、色々な惑星の王族に挨拶した時の癖が出てしまった。　リヴェリアさんの方を見ると、眼で少し大きくしてこちらを見ていた。
「ずいぶん礼儀正しいな、親の躾がよかったのか？　確かに王族だか、そんなに畏まらなくてもいいぞ」
「いえ、つい癖のようなもので……」
「癖？　癖になるぐらい親に厳しくしつけられたのか？」
「いえ、私には親がいません。この癖は、ちょっと事情がありましてこれからロキ様に話すところです」
「そっ、そうかすまない」
「いえ、大丈夫ですよ」
　私に親が居ないと分かった時にリヴェリアさんが謝ってきたが大丈夫と言った。

それから神ロキとリヴェリアさんと3人で話してたがそろそろ移動した方が良さそうだ。
「ロキ様そろそろ」
「おぉ、せやな、じゃウチの自室にいこか、リヴェリア今からアークとウチで話し合うからまたな」
「ああ、分かった」
神ロキの自室に行く為にリヴェリアさんと別れる事になったので頭を下げてから階段を上っていった。

神ロキの自室に向かっているのだか、先程から階段を上っている。

どうやら外から見た中で一番高い塔にあるようだ。
部屋につき中に入る、中には執務のための机とベッドと大量の本が入ってる本棚などがあったがそれ以上に酒が机や窓枠の所に沢山あった。
神ロキは、机の方に座り自分は部屋のすみにあった椅子を持ってきて、リュックを床に置いてから座った。
「さて、話してもらおうか」
「はい、実は私にはこことは違う別の世界のオーディンと会ったことがあります」
私は、ここの世界とは違う、別の世界の神オーディンの不注意で死んだことや転生したスターウォーズの世界での出来事を、スターウォーズの世界での功績で此方の世界に転生したこと、その際オーディンから加護を貰ったこと全てを話した。
話し終えると神ロキは、余りにも驚きでいつもは糸目気味な目を限界まで開け、口もあんぐりとして固まっていた。
少し時間がすぎると落ち着いたのか、疲れながらも
「はぁ～全然嘘ついとらんからびっくりしたわ、まさか別の世界のオーディンとはなぁ、それにその見た目でも人生経験豊富なんやな」
「まぁこの見た目ですが実際は85歳以上の経験してますからね」

まぁそれ以外にも体の感覚が少しズレがあったりしたけど、体を動かして直したけど、すると神ロキに質問をされた。
「この先、どうするん？」
「まだ未定ですが……」
原作よりかなり前だし予定なんて全然無いんだよなぁ、と考えていると、神ロキが真剣な表情で、
「なぁ、ウチのファミリアに入らんか？」
「えっ!!」
私は驚いた。　突然のファミリアの勧誘だからだ。
すると神ロキが真剣なままの表情で訳を話した。

「オラリオにおるウチを含めた神々はな、天界で退屈な日々に耐えきれなくなってな下界に降りてきたんや、神としての力が封じられてる代わりに、ウチらの恩恵を授けた人間が織り成す未知の物語を楽しんとるが、娯楽を最優先に動いてる奴もおるでなぁ、アークの様な特殊な人間がおったら色んな神に狙われるで、ならウチのファミリアに入ったらええで」
「なるほど……」

確かに色んな神に狙われるのは嫌だな……なら
「分かりました。入ります」
私はすぐに入ると伝えた、神ロキが満足した顔をして頷き
「そうかそうか、ならまずウチの首脳陣に挨拶しないとあかんから団長室に案内するで」
すると神ロキは立ち上がり団長室に向かうと言ったので一緒に団長室に向かうことになった。

第3話　首脳陣・勇者（フレイバー）との手合わせ

ファミリアに入らんかと言う勧誘に乗った私は、神ロキと共にロキ・ファミリアの団長室に向かっている。
廊下を歩いている所だか、ロキに聞きたいことがあり呼び掛ける。
「ロキ様ちょっといいですか？」
「ええよ～、それとな、そんな様なんてつけなくていいで」
ロキが此方に振り返り話を聞いてくれるのと同時に敬称を付けなくていいと言われた。
「ここのファミリアって首脳陣の方って何人いるんですか？」
「ウチのファミリアはな、最古参の3人がおるんやそいつらが首脳陣をしておるんや、さっき会ったリヴェリアもその内の1人やで」
ロキがファミリアの首脳陣の事を話してくれた。
話しに夢中になっていたのか団長室に直ぐ着いた。
、ロキの自室がある階から1つ下だったため降りてすぐだった。
「邪魔すんでぇ～」
ロキが団長室の扉をノックをせずに開けそのまま部屋の中に入ってたので、自分もついて中に入ると、中は執務の為の立派な机と椅子があり応接用のソファとテーブルとかも置いてあった。椅子に座り執務をしてた団長と思われる黄金色の頭髪に碧眼の幼い少年のような外見をした人から苦言を言われてるのが聞こえた。
「ロキ……普通はノックをしてから扉を開けるよね？」
「いやぁ、すまんすまん今度から気を付けるわ」
「全く……」
ロキが注意を受けても全く反省しない様子に少年が呆れていたが、私に気づいたのか、こちらを見て
「所で、君は誰だい？」
「私はロキさんの勧誘で、ここのファミリアに入団する事になりましたので団長にご挨拶をと思いまして来ました」
「へぇ、ロキからの勧誘ね……」
少年は私が、ロキから勧誘で来たということに、一瞬思案したが、す

ぐに挨拶をしてきた。
「すまない、自己紹介がまだだったね僕の名はフィン、フィン・ディムナだよ。　種族は小人族(パルウム)で、二つ名は【勇者(ブレイバー)】ロキ・ファミリアの団長をしている者だよ」
「自分はアーク・ウィンドウと言います。　種族はヒューマンです。
　アークで構いません」
「そうか、じゃあアーク僕の事もフィンでいいよ」
「分かりました。　フィンさん」
　お互いに自己紹介をしていると神ロキがすまなさそうに
「あ～、せっかく親交を深めてる所を邪魔したくなかったけど、フィン今からここにリヴェリアとガレスを呼んできてくれへん？」
「リヴェリアとガレスを？　分かった今連れてくるよ」
　フィンさんはすぐに立ち上がり部屋から出ていった。
　出ていった後、ロキと私は対面するようにソファに座り呼びに行ってる間にロキに提案をした。
「ロキさん、ここに入団するに当たって首脳陣の3人には私の前世の事を話した方がいいでしょうか？」
「そうやなぁ、流石にこれは話した方がええな3人にはウチも一緒に話すで」
　ロキと話しをしていると扉が開きフィンさんを先頭に先ほどホールの方で会ったリヴェリアさんと、口まわりに髭を生やし、小柄ながらも屈強な肉体をしたドワーフの人が入ってきた。
「ロキ連れてきたよ」
「フィンに呼ばれてきたのだが、アークもいたのか」
「話しは聞いとったが、まだ小さい子供じゃないか」
　フィンさんは2人を連れてくると空いてるソファに座り、リヴェリアさんは此方を見たので、軽く会釈をして最後のドワーフの人に挨拶をするために立ち上がり近づいた。
「初めまして私の名前はアーク・ウィンドウと言います。　アークと呼んでください」
「ほぉ、なかなか礼儀正しい子じゃないか、儂の名はガレス・ランド

ロックで二つ名は【重傑(エルガルム)】見ての通りドワーフだ、こいつらとは腐れ縁で、ファミリアの立ち上げの時から一緒だ、ガレスでいいよろしくなアーク」
「はい、よろしくお願いいたします」
私とガレスさんは握手をして、皆がソファに座るとロキが本題を切り出した。
「実はなぁ、このアークをウチのにファミリアに入れる事にしたんや」
ロキが話すとリヴェリアさんとガレスさんは、非常に驚きロキに詰め寄った。
「アークの事を誘拐してないと言ったが、まさかファミリアに入れようとするなんてどう言うことだ」
「そうじゃまだこの子は小さいではないか」
ロキは詰め寄られてあたふたしているので代わりに説明をした。
「広場に座っているとロキから話しかけられてここに来て、ロキの部屋で話し合いをして、ロキファミリアに入る事になりました」
説明をしたからなのか2人は落ち着きを取り戻してソファに座った。
その時フィンさんが、ロキに質問をした。
「ロキ、さっきアークの事を勧誘したと言ったよね何か彼には事情があるのかい？」
フィンさんの問いに、私とロキはお互いを見て頷きロキが真面目な表情をしたのを見たのか、3人は此方を見たので私から話し始めた。
「実は私は……」
ロキに言った事をそのまま3人に話した。
最初は、嘘だと思ったらしくフィンさん達はロキに何度も確認を取ったが全てが本当だと分かると物凄く疲れた様子だった。
暫くして、落ち着いた3人だが
「なるほどね……前世の記憶を持ち、ジェダイとかそう言う未知な物は他の神々に取って格好の獲物だからか、確かにそういった事情だと入団した方か良さそうだ」
「そういうことか、外交官として、何度も王族と会って挨拶をしている

から癖になっていたのか……」
「まさかこういった事があるとはのぉ」
呆然としてた。　まぁ普通はないことだからな……
するとフィンさんからあることを聞かれた。
「君の事はアークさんと呼んだ方がいいかな？」
「そうじゃのう、リヴェリアならともかく実質的に儂とフィン以上の年上だからのぉ」
フィンさんからさん付けで呼んだ方が言いかと言われガレスさんも同調していた。
まぁ確かに前世とか含めるとフィンさんとガレスさんを越える年を取っているからそう考えたみたいだけど私は気にしていないからフィンさんに、
「いえ、私の事は先ほどまでの様に呼び捨てで構いません」
私がそう言うと、フィンさんとガレスさんは
「じゃあ僕の事もフィンと呼び捨てでいいよ」
「わしも呼び捨てでかまわんぞ」
「分かりました。　フィン、ガレス」
フィンとガレスと話しているとリヴェリアさんから
「前の世界では、マスターと呼ばれる師匠が何人もいたのだな、その中の1人に作法とか学んだのか？」
「ええ、マスターの内の1人が貴族出身だったので、礼儀作法とか色々と」
その1人と言うのがかの有名なドゥークー伯爵なのだか……　するとフィンから
「君はそのジェダイという組織の中でも最強と言われた内の1人だったんだよね？」
「ええまぁ回りの皆に言われてましたから」
あの時、マスターヨーダと義父であるマスター・ウィンドウと並ぶ存在と言われてたからなぁと考えていると、
フィンから突然
「アーク、君の実力を見てみたい今から手合わせを願いしたい」

「手合わせですか？」
驚いた。
突然手合わせをしたいと言われたからだ。
するとリヴェリアさんが
「フィン何を言うのだ!!　彼は前世で最強のジェダイと言われていたが、この世界では、体は子供でそれに恩恵（ファルナ）を刻んでいないんだぞ!!」
「まぁ確かに普通は恩恵（ファルナ）を刻まれていない人は、恩恵（ファルナ）を刻まれた冒険者には勝てないけどね、でもね……」
リヴェリアさんが怒ったがフィンさんが、異常に震える指を回りに見せながら
「さっきから彼と戦かうイメージをした途端僕の親指が異常に疼くんだ、今まで自分よりも強いモンスターと戦う時に指は疼くけどもこれ程までに疼くことは無かったんだよ、だから実際にやってみて確かめたいんだよ」
なるほど……自分も今の実力を確かめたいし、丁度いいか
「分かりました。　やりましょう」
承諾するとリヴェリアさんが、此方を心配そうに見て
「大丈夫なのか？」
「はい、大丈夫ですよ」
リヴェリアさんに安心させるように言うと、ほっとした顔をしてた。
それからここにいる全員で中庭に、向かいそこで、フィンと一対一の手合わせをする事となった。
中庭に向かう途中廊下を歩いていたのだが、他の団員達に見られて、ひそひそと何か言ってた。
『あれ？　ロキ様とフィンさんとリヴェリアさんとガレスさんだ。それに見慣れない小さい子供も一緒にいる』
『もしかして新しく入る子なのかな』
『いやいやあんな小さい子供がかい？　無いだろう、それにしても何処に行くんだ？』
『ねえこの先って、確か中庭だよね？』

『本当だ、まさか本当に入団試験？』
何を言われてるか分からないがかなり見られているな……
見られながらも歩いていると中庭に付いたので、私とフィンが向かい合い、ロキとリヴェリアさんが邪魔にならない所に立ちガレスが立会人に立ち、フィンは槍を構え、私はライトセーバーを持ちスイッチを押して緑色の光刃が出る。
フィン達は、少し驚いていた。
「話しは聞いてたけどそれが君達ジェダイの武器、ライトセーバーなんだね」
「ええ、ジェダイを象徴する武器でもあるため誇りを持っています」
フィンと少し話し、私は一番最初に学んだフォームで、シャイ＝チョーの構えを取った。

今僕は、槍を構えながら先ほど会ったばかりのアークと対峙を向き合っている。
アークがライトセーバーと呼んでいる金属で出来た柄腰に吊り下げていたのを持つと何かを押した途端に柄の先端から緑色に光る刃が出てきた。
話しは聞いてたけど、凄い武器だな……
彼が構えを取ったので此方も集中をして見た瞬間突然目の前に彼が現れて、驚いていると、振り下ろしてきたので、慌てながらも防ごうと槍を合わせるが光刃が触れた瞬間、鉄で出来てる筈の槍が真っ二つになった。
驚きで硬直してると、いつの間にか背後に回って首筋に先ほどの光刃を、当たる寸前で止めていた。
僕の負けだな……両手を上げ降参をした。

フィンが手を上げて降参したので、ライトセーバーをしまうとフィンから
「やはり君は強いね負けたよ」
「ありがとうございます」
フィンと握手をしているとガレスが
「恩恵(ファルナ)を刻んとらんのに、フィンに勝ちよったか凄いじゃないかお主」
称賛されたので頭を軽く下げると
「フィン、実力も分かったことだしアークを正式に入団させるで～ええな」
ロキがフィンに聞いてきたので
「あぁ分かっているよもちろん歓迎するよ」
フィンに入団の許可が降りてほっとしてると
「アーク今度は儂と手合わせせんか、ロキから恩恵を刻んだ後でいいぞ」
「いいですよ」
ガレスから後で手合わせを申し込まれたので、返答をしてるとリヴェリアさんから
「アーク、入団したからにはダンジョンとかの知識を覚えて貰うぞ、ロキに恩恵(ファルナ)を刻んで貰ったら後で私と勉強をするぞ」
「よろしくお願いいたします」
ダンジョンについて勉強をすると言われ、頭を下げているとロキに
「よ～し、じゃあアークそろそろ恩恵(ファルナ)刻むためにウチの自室に行こうか」
こう言われたので、ロキと一緒に部屋に向かった。

第４話　神の恩恵・ステイタス

　中庭での、フィンとの手合わせをして、私の圧勝で終わり３人の首脳陣から入団を許可され、恩恵を刻んで貰うためロキと２人で彼女の部屋に向かっている。
　向かう道中ロキから、先程の出来事を話した。
「いやぁ、まさかフィンの槍を切断して、切断された一瞬の動揺の隙をついて背後を取り、首に武器を突き付けるなんて、凄いやん」
「ありがとうございます」
　称賛されたので、返事すると
「フィンはな、オラリオでは数少ないレベル５の冒険者の１人なんや、それに勝つとはホントに驚いたで……」
　ロキは本気で驚いてた。
　それと少し気になることが出来た。
「ロキ、そのレベルというのはどういう風に出るのとこのオラリオでの最高レベルの冒険者はどのぐらいの数字なのですか？」
　そう言うとロキは、
「ん？　あぁそこら辺まだ話してへんか、部屋で説明するわ」
　そう話しているとロキの部屋に着いた。
　ロキは近くに有った椅子をベッドの近くに置き、ここに座って～と言われ座ると、ロキはベッドに座り、先程の続きを話した。
「ウチら神が刻んだ恩恵（ファルナ）を具体的に数値化したものをステイタスと言うんや、基本と発展アビリティ、スキル、魔法、そして総合的階位を示すのがレベルで、それらが構成されとるんや。　今このオラリオにおる最高レベルは６で、うちと同じく最強のファミリアでフレイヤちゅう女神が主神の【フレイヤ・ファミリア】で、副団長をしとるオッタルちゅう猪人（ボアズ）が今の最高レベルの冒険者やな」
「そうなんですか……」
　ステイタスの総合でレベルが分かるのと６で最高かと考えていると、
「さて、そろそろ恩恵（ファルナ）を刻むで、やり方はな、神が自分の血を媒体にし

て体に神聖文字（ヒエログリフ）っちゅう神の言葉を刻む事で発現するんや、まぁ大半は背中に刻むんやけどな」
「背中にですか？」
「せやその方が一番やり易いんや」
　ロキにそう言われ上の服を脱ぎ背中を向けるとロキが驚いていた。
「おおっ、6歳とは思えへん鍛えぬかれた体やなぁ……っとやるか」
　そう言うと針を取り出し自分の人差し指に刺して血が出たのを確認してから私の背中に一直線に指を滑らせた。
　すると背中がじんわりと暖かく感じると、何処からか羊皮紙を取り出して背中に張り付けた。
「ロキ？　その羊皮紙は何です？」
「ああっこの羊皮紙はな、ステイタスをこの羊皮紙に写すんや。やけどこのまま神聖文字（ヒエログリフ）のままだと君らでは読めんからなぁ、それを共通語（コイネー）に変えて羊皮紙に写すんや」
　そうなのかと考えていると、
「写し終わったで、さぁてどんなかん……じ……や……て……」
　写し終えたので、服を着直しているとどんなステイタスなのかロキは見た瞬間なぜが固まってしまった。
「なっ、なっ、なっ、なっ」
　ロキが言葉を詰まらせてる時に、突然フォースの未来予知が発動した。
　予知の中身を見て、すぐに耳を塞いだ。
「なんじゃこりゃ〜〜〜〜〜〜〜〜〜!!!」
　ロキの驚いた声が【黄昏の館】中に響いた。
　耳を塞いだおかげで何ともなかった。
「ど、どうしたんですか、何か驚く様なものでもあったのですか？」
「あ、ああ、これは驚いたで……」
　どんなことが書かれてるのだろうかと考えていると
ドドドドドドドドドドド
　ん？　誰か此方に来てる？　ロキは気付いていないようだ。
バン!!

「「うぉっ!!」」
「ロキ何があった!!」
　するといきなり扉が開いたことに私と、先程まで呆然としてたロキが驚いていてたが、扉を開けた人は先程中庭で別れたフィン達でフィンが何かあったのかを聞いてきた。
「いっ、いやぁ今アークに恩恵(ファルナ)を刻んでステイタスを紙に写したんやけどありえへん事が写ってたんや」
「あり得ないこと？」
「とりあえず部屋の中に入ってな～」
　ロキの言葉にフィン達は首を傾げていたが、言われたとおり中に入ってもらった。
「それでロキ改めて聞くけど彼のステイタスがどうしたんだい？」
「それなんやけどな～」
　ロキがステイタスが写した紙をフィン達に見せようとしたが
「待て、アークには確認を取ったのか？」
　リヴェリアさんが真剣な表情でロキを見ると、ロキはしまったという顔をしてた。
　するとロキが此方を見て
「アーク本当はな、同じファミリアの人でもステイタスはそう簡単に見せてはいけないんや、他の人には知られたくないことも書いてあるからなぁ」
「そうなんですか……」
　確かに自分の秘密を知られたくないな・・
「そう言うことだアーク、嫌なら私達は部屋を出よう」
　リヴェリアさんがそう私に真剣な表情で此方を見て言って、他の２人もなにも言わないが真剣な顔をしてたので同じ思いなのだろう。
「いえ3人にも見てもらいたいです。　貴方達には私の過去(前世)のことも知っていますので大丈夫です」
　この３人には見せても大丈夫だと判断をする。
　私は、リヴェリアさん達にそう言ってロキの方を見ると
「了解や、では見せるで」

ロキは、そう言うとステイタスが書かれた羊皮紙を私達に見えるようにした。
「「「なっ!!!!」」」
３人は驚愕していた。
私も見た。
そこには……

アーク・ウィンドウ
Ｌｖ：　８　《ランクアップ現在不可》
力：　Ｓ　９９９
耐久：　Ｓ　９９９
器用：　Ｓ　９９９
敏捷：　Ｓ　９９９
魔力：　Ｉ　０
剣士：　Ｓ
フォース：　Ｓ
教官：　Ｓ
成長：　Ｓ
《魔法スロット》
【】
《スキル》
【平和の騎士（ジェダイ）】
・治安を乱す者を相手にする時全能力に超高補正
・平和の守護者
・ライトセーバーとライトサイドのフォースを操る者
【騎士の頂点（グランドマスター）】
・ライトセーバーとフォースを使う際の超高補正
・ジェダイを代表する者に与えられる称号
【全ての型を極めた者（ザ・オール・マスター）】
・フォームの切り替えの無駄が全く無くなる
・ライトセーバーを扱う際の７つの型と派生の型２つを極めてる。

・フォーム1：シャイ＝チョー　基礎の型
・フォーム2：マカシ　変幻自在の型
・フォーム3：ソレス　防御の型
・フォーム4：アタル　アクロバティックの型
・フォーム5：シエン　攻撃の型
・フォーム6：ニマーン　総合の型
・ニマーンの発展派生型　ジャーカイ　二刀流
・フォーム7：ジュヨー　究極の型
・ジュヨーの発展派生型　ヴァーパッド　苛烈の型

【あらゆる生命（フォース）や自然の中に含まれる（ス）力】

・このフォースを知覚して操ることで、様々な超常現象を起こすことができる
・フォースは誰もが持ってる
※但し扱えるには、ある種の精神修行や独自の技術と体内細胞に含まれるミディ＝クロリアンという共生生物の有無と数値が重要になってくる。
・フォースで使える力
・未来予知
別名フォース・ヴィジョンと名前のある技で白兵戦における瞬間的な先読みから、近遠の未来を見通す未来予知まで、ありとあらゆる事象を見通すことができる。
但しヴィジョンで見る未来予知は正確に把握する事は熟練のジェダイでも難しい。
・念動力
手を触れずに物体や生物に物理的に干渉する能力。
対象をフォースの斥力で飛ばすフォース・プッシュ
対象をフォースの引力で引き寄せるフォース・プル
フォースで対象を自在に動かし、扉や鍵が掛かってる物、フォースでしか起動しない物を解閉でき熟練なら高重量の物、複数の対象を動かせるフォース・チョーク
フォースの見えない手で相手を浮かせて首を絞めたりドロイド並

の強固な物を握り締める動作で潰して圧壊する事が出来るフォース・グリップ

・フォース・スロウ

フォースでエネルギー体、生命体また物体の動きを一時的に蔓延させる、込めるフォースの力により持続効果が変わる。

・探知

フォースに身をゆだめて自身の周囲状況を感知、把握、人や物を探すことができる。

・身体能力の強化

脚力や腕力の強化。

フォースによる高速移動のフォース・ダッシュ

フォースよる跳躍フォース・ジャンプ

フォースによる二段ジャンプ技フォース・フリップ

主には自身の内なるフォースを呼び起こしたり、周囲のフォースを取り込んで、体内に溜め込み強化する方法を用いる。

・治療

上記身体能力強化の延長にあたる技術。

別名フォース・ヒーリング、自身に対して自律的に心身を回復させる効果は無論、毒への抵抗を高めたり鎮痛効果を発揮させ治癒力を促進させる、また相手にも自信の生命力で治療する事も可能。

※但し対象となる生物の生命力を自身の生命力でリソースとする為、無理に治療すると自身の命が失うリスクもある。

・フォースの壁

フォースによって見えない壁を造る。込めるフォースの力によって範囲と強度が変わる念動力の近縁とでもいった技術である。

・読心術

他人や物に込められたフォースの心と記憶を読む力。

別名フォース・エコー、強い感情の起伏の影響を受けた人や物のフォースの揺らぎを認知する、といった仕組みのもので深層心理に干渉出来る。

感情を読み取っている以上、相手は常人ではない強固な意志で感情

を抑えてなければ防ぐ事は不可能。

・テレパシー

他者の精神への干渉能力の応用として、遠く離れた者とフォースを通じて会話する。

更に発展するとビデオ通話のように互いの姿を見ながら会話したり、言語を話せない動物に意思を伝え対話し心を繋げて助力して貰う事も可能。

・マインドトリック

他人の心を操る能力。

尋問の際に自白させるのにも有用、またウォーカーに搭乗してる相手を直接見なくてもフォースで直接干渉して操る事もできる。

但し誰にでも通用するわけではなく、強固な意志を持つフォース感応者の心を操ることはできない。

・霊体化

フォースで辿り着くひとつの極致。

死後フォースと一体となり、霊体となって永遠の存在となる、本人の意思でフォースを使い物理的に干渉もできる。

・天候操作

フォースで雷雲を作り出し操り雷を落とす。

・物体の転移

フォースを通じ空間を越える、場合によっては時間すらも越えて、物体や生物を転移させる。

【騎士才能（ジェダイタレント）】

・ライトセーバーとフォースの天性の才能を持つ

【限界突破（リミットオーバー）】

・成長限界が無い

【受け継（インヘリティド）れる物】

前世の知識・経験・技術・身体能力が受け継がれる

※但し現在は全盛期の力を持つと体に大きな負担になるためレベルが制限される

※12歳で全盛期の力になる
【教　官(インストラクター)】
・超優秀な人材に育てる事が出来る才能
・鍛えた人物の経験値が大量習得する
【戦争と死の神の加護(オーディンブレッシング)】
・別の世界の北欧神話の主神オーディンの加護
・魅了無効化
・同郷の神に早く会う
・神造兵器使用可能
羊皮紙にはこの様に書かれていた。
「ロキが驚くのも無理無いよ、こんなスキルだとこの世界では未知だし、さらには今のオラリオにはいないレベルが8だからね……」
「あぁ、全くじゃ」
フィンとガレスが驚嘆の顔で言った。
「それにしても前世の経験を受け継がれてる事は、6歳の時点でレベル8位の実力があったんだね・・・」
「ええ、才能を貰ったので必死に鍛えたらそうなりました」
驚愕していたフィンが我に戻り、そう聞いてきたのでそう答えていると
「いやいやそれもそうやけど、特にヤバいのはこれやろ」
そう言うとロキは【戦争と死の神の加護(オーディンブレッシング)】の所に指を指して
「なんやこの神造兵器使用可能って・・・他の奴ならまだしもこれはやり過ぎやて・・・」
そう言うとロキは疲れた表情して椅子に座り、髪の毛をくしゃくしゃとやりながら頭をかくと、フィン達3人の方に顔を向けて
「分かってるとは思う取るけど、この事はここにおる5人だけの秘密な」
「「勿論だ」」
3人がそう言ったので、ロキは安心した顔になりほっとしていると
「アークこのフォースとは、あらゆる生命にある力だったよな?」
「ええ、そうですがそれが?」

リヴェリアさんの質問に答えると
「何、我々もこのフォースを使えるのではないのかと思っからだ」
確かにあらゆる生命に宿す力だからなぁ・・・だけど
「あぁ～どうでしょう？　まず体内細胞に含まれるミディ＝クロリアンという共生生物の数値を調べないといけないですからね」
こっちの世界（オラリオ）でまだ調べたことないから分からないからなぁと思っていると
「そうか、分かった」
リヴェリアさん2人で話していると
「さてそろそろアークを他の団員達に紹介したいからそろそろ行こうか」
「何や皆集まってるのか？」
「ああロキに【恩恵（ファルナ）】を刻んで貰ったら紹介しようと食堂の方に集まって貰ってるんだ」
フィンの用意の良さに感心していると
「そうか、んじゃ行こうか」
そう言うとロキが立ち上がり皆で部屋を出て食堂に向かった。